

第4章 中世大友府内町跡第72次調査

第1節 調査の概要

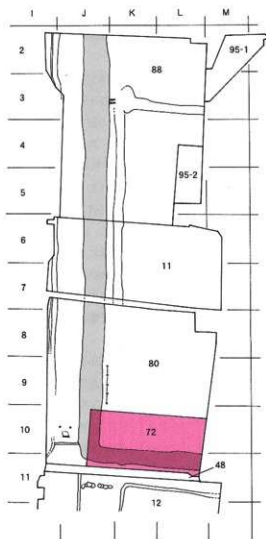
調査期間
平成18年
(2006)
9月27日～
平成19年
(2007)
3月12日
調査面積
約300㎡

本章で報告する中世大友府内町跡第72次調査は、一般国道10号拡幅事業に伴い国土交通省大分河川国道事務所からの委託を受けて実施したもので、平成18年(2006)9月27日から平成19年(2007)3月12日までの約6ヶ月半、発掘調査を行った。発掘調査面積は約300㎡である。

本調査区は、平成13年(2000)度に調査を実施した第12次調査および平成16年(2004)度に調査を実施した第48次調査の北側に位置する調査区(第141図)で、発掘調査開始以前には駐車場として利用されていた。

発掘調査は9月27日から表土剥ぎに着手し、10月2日からは作業員を投入して、本格的な発掘調査に着手した。調査区からは、16世紀末葉頃に掘削された堀が検出され、その内部から多量の瓦や自然遺物が出土した。遺物の出土状態の記録や取り上げ作業などにやや時間を要することになったが、全体的には調査は順調に進み、2月13日にラジコンヘリによる空中写真撮影を実施した。この後、3月上旬にはすべての遺構の掘り下げをほぼ完了し、3月12日には実測作業なども含め、現地でのすべての作業を終了することができた。

なお、国土交通省との協議によると、今回の発掘調査地点付近では国道建設工事がすぐには実施されず、次年度となる平成19年(2007)5月からは、引き続き調査区に隣接する北側と西側の地点で発掘調査が可能となっていた。そのため、平成19年度は本調査地点の北側と西側を拡張する形で広い範囲を発掘調査することになり、遺構の広がりを見地で確認・検討することができるようになった。従って、本年度は調査区の埋め戻しは行わず、次年度の調査に備え、シート掛けなどによる遺構の保全を実施した後、現場を撤収することになった。



第141図 調査区位置図(1/800)
※数字は調査次数

第2節 調査の概要

1. 遺構の概要と基本層序

時宗寺院
「称名寺」

中世大友府内町跡第72次調査区は1987年に大分市史編さん委員会が作成した「戦国時代の府内復元想定図」によると、豊後府内で第2の規模を誇る時宗寺院「称名寺」の領域に相当し、これまで実施されてきた周辺地域の調査実績からも、称名寺に関わる遺構・遺物が存在することが想定されていた。

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査では、事業対象地区を国土座標（旧日本測地系）に乗せた10m方眼で区画している。それぞれの区画には西から東へJ～M、北から南へ1～78の番号を付し、アルファベットと数字の組み合わせで、各々の区画を呼称することになっている（例えばJ10区など）。本章で報告する第72次調査は、東西J～M区、南北10・11区に相当する（第141図）。

発掘調査は記録保存を前提とし、検出された遺構はすべて完掘する方針で、調査に臨んだ。

基本層序

本調査区周辺は、発掘調査以前にはアスファルト敷きの駐車場として利用されており、アスファルトの下位には細かい砕石で構成される近年の客土が約1.1～1.2mの厚さで置かれていた。客土の下位には、近世以降と推定される旧表土（耕作土）や旧水田床土が約10～20cmほど堆積している。客土と旧表土および旧水田床土の一部については大型重機で掘削・除去を行い、それより下位は人力による掘削を行った。

堀 SD025

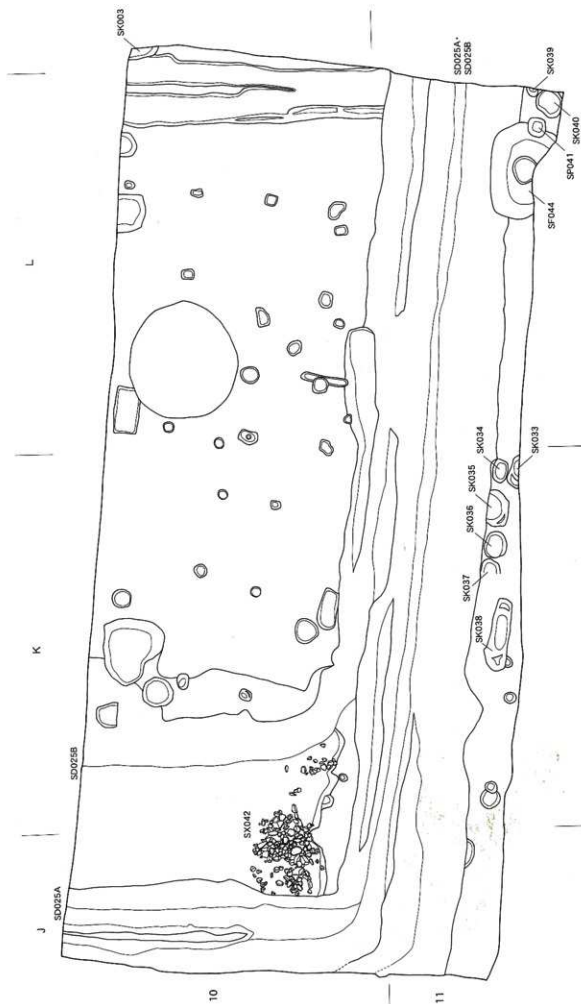
人力掘削ではカキ板・ネジリガマ・移植ゴテ等を使用し、数cmから5cm前後の一定深度で掘り下げを数回繰り返して、掘り下げた面をきれいにしながら、併行して遺構検出を行った。その結果、調査区北東側のK10～M10区では、標高4.4m前後で地山である明茶褐色粘質土が現れ、色調の違いから、石列や柱穴・土坑・井戸と推定される遺構埋土の上面プランが明瞭に検出できた。また、調査区南側と西側では、L字状に屈曲した堀（SD025）と推定される遺構のラインを検出した。堀の一部にサブトレンチを入れて、土層を確認しながら掘り下げ行ってみると、どうやら堀は16世紀末葉頃に掘削された堀SD025Aと15世紀代に掘削された堀SD025Bというふたつの大型遺構が重複していることが分かってきた。15世紀代に比定されるSD025Bは、称名寺の寺院を区画する堀である。それに対して、16世紀末葉に比定されるSD025Aの性格が問題になる。称名寺は寺伝によると、16世紀後葉の永祿年間（1558～1570年）頃に寺所を豊後府内の名ヶ小路町（本調査区付近）から沖の浜に移すとされているからである。つまり、寺院が移転したとされているのにも関わらず、旧寺院地の領域を拡大する形で堀の掘削がなされていることになる。これらの遺構の評価については、検討に値する問題である。

さらに16世紀末葉の堀SD025Aが埋まった後には、石列SX014や石組傾溝SD031が構築されることが判明し、加えて調査区南辺付近に豊後府内の東西道路である「名ヶ小路」の一部と推定される道路遺構が存在していることも明らかになった。

堀SD025の掘り下げでは、埋土上層に堀の埋め立て時に投げ込まれた瓦や石塔類、埋土下層に堀の機能時に廃棄された食物残渣と推定される動物骨や木器などの自然遺物が大量に含まれていた。堀から出土した遺物の実測図作成や取り上げに従事したのは、民間の発掘支援会社からの調査員である。本調査区の発掘調査では、調査着手の初期の段階から、遺跡の測量や個別遺構の実測作業を民間の発掘支援会社に委託していた。堀からの出土遺物は膨大な量に及び、実測作業等にやや時間を要することになったものの、発掘支援会社からの調査員の活躍で全体的には作業が順調に進み、堀から出土した遺物の記録や取り上げも順調に実施することができた。堀SD025Aの埋土下部からは頭に穴を開けられたウシの頭骨や肋骨や背骨が繋がった状態のもの、人工遺物としては「元青花梅瓶」や「甌瓦」の破片などの出土が認められ、注目に値する資料であることが判明した。

第7表 中世大友府内町跡第72次調査遺構一覧

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SP001	S001	溝跡	L11区	17世紀初頭～前半	名ヶ小路最終段階の瓦敷き道路	132
SE002	S002	井戸	L10区	16世紀末葉～17世紀初頭		209
SK003	S003	土坑	K10区	16世紀末葉～17世紀初頭		202
SK004	S004	土坑	L10区	16世紀末葉～17世紀初頭		202
SK005	S005	土坑	L10区	16世紀末葉～17世紀初頭		202
SK006	S006	土坑	L10区	16世紀末葉～17世紀初頭		202
SI007	S007	瓦葺り	K10区	16世紀末葉～17世紀初頭		205
SP008	S008	溝跡	K11区	17世紀初頭～前半	名ヶ小路最終段階の瓦敷き道路	
SP009	S009	柱穴	L10区	16世紀末葉～17世紀初頭		
SP010	S010	柱穴	L10区	16世紀末葉～17世紀初頭	竪立柱建物S0045を構成する柱穴	201
SP011	S011	柱穴	L10区	16世紀末葉～17世紀初頭		
SP012	S012	柱穴	L10区	16世紀末葉～17世紀初頭		
SP013	S013	柱穴	L10区	16世紀末葉～17世紀初頭	竪立柱建物S0045を構成する柱穴	
SK014	S014	石列	K11～L11区	16世紀末葉～17世紀初頭	名ヶ小路北辺の石列	134
SP015	S015	柱穴	L10区	16世紀末葉～17世紀初頭	竪立柱建物S0045を構成する柱穴	
SP016	S016	柱穴	L10区	16世紀末葉～17世紀初頭		
SK017	S017	土坑	L10区	16世紀末葉～17世紀初頭	復原遺構である可能性も考慮(?)	202
SK018	S018	土坑	K10区	16世紀末葉～17世紀初頭		202
SP019	S019	柱穴	K10区	16世紀末葉～17世紀初頭		
SP020	S020	柱穴	K10区	16世紀末葉～17世紀初頭		
S021	S021	—	—	—	欠番	
S022	S022	—	—	—	欠番	
SP023	S023	柱穴	K10区	16世紀末葉～17世紀初頭		
SP024	S024	柱穴	L10区	16世紀末葉～17世紀初頭		
SD025a	S025	堀	J10～L11区	16世紀後葉～末葉	「大黒旗施設」設置の堀	138
SD025b	S025	堀	J10～L11区	15世紀後葉	「寺院」発掘(跡名寺)の堀	135
S026	S026	—	—	—	欠番	
SP027	S027	柱穴	J10区	16世紀末葉～17世紀初頭		
S028	S028	—	—	—	欠番	
S029	S029	—	—	—	欠番	
SP030	S030	溝跡	J11～L11区	16世紀	名ヶ小路	131
SK031	S031	土坑	J11～K11区	16世紀末葉～17世紀初頭	名ヶ小路の石組側溝	132
S032	S032	柱穴	K10区	16世紀末葉～17世紀初頭	欠番	201
SK033	S033	土坑	K11区	16世紀後葉	名ヶ小路形成上下位から覆り込まれている。	205
SK034	S034	土坑	K11区	16世紀後葉	名ヶ小路形成上下位から覆り込まれている。	205
SK035	S035	土坑	K11区	16世紀後葉	名ヶ小路形成上下位から覆り込まれている。	205
SK036	S036	土坑	K11区	16世紀後葉	名ヶ小路形成上下位から覆り込まれている。	205
SK037	S037	土坑	K11区	16世紀後葉	名ヶ小路形成上下位から覆り込まれている。	205
SK038	S038	土坑	K11区	16世紀後葉	名ヶ小路形成上下位から覆り込まれている。	205
SK039	S039	土坑	L11区	16世紀以前(?)	名ヶ小路にバックされている。	205
SK040	S040	土坑	L11区	16世紀後葉	名ヶ小路形成上下位から覆り込まれている。	205
SK041	S041	土坑	L11区	16世紀後葉	名ヶ小路形成上下位から覆り込まれている。	205
SK042	S042	土坑か?	J10～K10区	14世紀	堀S0025から切られる。	205
SP043	S043	柱穴	K11区	16世紀末～17世紀初頭		
SP044	S044	井戸	L11区	16世紀以前(?)	名ヶ小路にバックされている。	211
S045	未設定	竪立柱建物	L10区	16世紀末～17世紀初頭	報告書作成時に遺構番号を設定	201



第143圖 中世大友府内町跡第72次調査遺構配置図②(1/100)

第4章 中世大友府内町跡第72次調査

遺構面は1面 本調査区の遺構面は、基本的には1面である。ただし、検出された遺構群の切り合い関係や時期を検討してみると、堀SD025Aが完全に埋まった後に構築された遺構群とSD025Aが機能時期およびそれ以前に構築された遺構群の大きく2つに大別できるようである。そこで前者を「上層遺構群」、後者を「下層遺構群」と呼称することにした(第142・143図)。

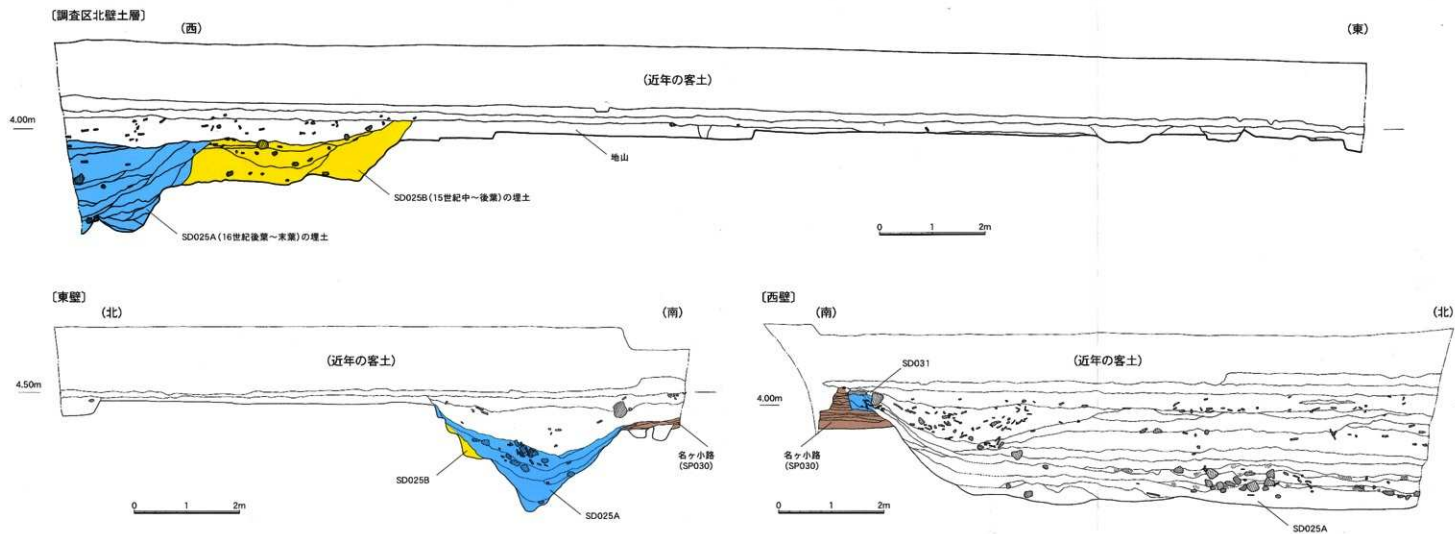
上層遺構群…16世紀末葉～17世紀前葉 「上層遺構群」(第142図)は、掘立柱建物跡・柱六・土坑・瓦溜め・石列・石組側溝などで構成されている。出土遺物や遺構の切り合い関係などより、島津侵攻(天正14年=1586)後の16世紀末葉から17世紀前葉に構築されたものと推定される。

下層遺構群…16世紀末葉から14～15世紀代 「下層遺構群」(第143図)は、堀SD025や東西街路である「名ヶ小路」SF030などで構成されている。また、SF030に帰属する整地層の途中から掘り込まれた廃棄土坑(ゴミ捨て穴)や名ヶ小路が造られる以前に構築された井戸や土坑なども、下層遺構群の中に入っている。遺構群の年代は、島津侵攻以前である16世紀末葉から14～15世紀代である。

以下、遺構の詳細と出土遺物を紹介するが、記述の都合から、遺構群の上下に関わらず、道路・堀・土坑・井戸など、遺構の種類毎に報告を行うこととしたい。



中世大友府内町跡
第72次調査
調査風景



(左) 調査区西壁土層近景
(名ヶ小路SD030、側溝SD031)
(右) 調査区西壁土層

2. 第72次調査の遺構・遺物

(1) 街路・街路側溝・石列

SF030 (第9図)

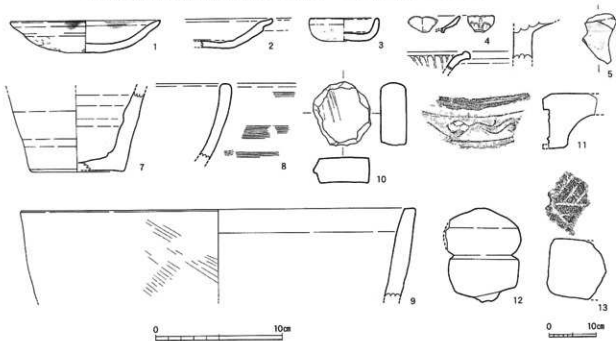
SF030は層厚5cm程度の砂質土と粘質土を交互に堆積させる整地層群で、数単位の層群の上面が硬化していることから、街路遺構と断定できる。整地層は調査区西壁の土層(第144図)では、11層の土層群が50cmの厚みで堆積しており、3面以上の硬化面が認められる。調査区西壁の土層(同)では、土層群の厚みは15cm程度と薄いものの、その上位に堀SD025を埋設する時に生じた土層が約30cm堆積している。堀SD025は街路遺構SF030を形成する土層群を切って構築されていることも確認できる。SF030は東西方向に伸びており、第72次調査では幅1.5~2.0m、総延長24.5mを検出した。その位置関係から、中世府内の東西街路のひとつである「名ヶ小路」に相当する街路と考えられる。名ヶ小路は第12次調査・第48次調査¹⁾でも検出されており、特に第12次調査では街路南側の側溝が確認されている。第72次調査SF030は名ヶ小路の北半部に相当し、後述する石列SX014や石組側溝SD031が道路北縁部を構成する遺構となる。第12次・第48次・第72次調査の所見を総合すると、名ヶ小路の街路幅員は約3.0~3.5m程度であったことがわかる。

名ヶ小路

幅員
約3.0~3.5m
程度

名ヶ小路は17世紀初頭から前半頃まで存続して使用されていたことが確認されているが、その構築の初現時期はまだ判明していない。道路を形成する土層群中からは16世紀代の遺物が出土しているが、遺構構築の初現時期を確認できる遺物は認められなかった。

第145図はSF030を形成する整地層中からの出土遺物である。1・2は京都系土師器皿、3は手摺ね整形による小型の土師器皿である。4は青軸小皿の小片で、内外面にコバルトブルーの翡翠釉が施されている。5は五彩の小片で、器種不明。6は瀬戸美濃系の折縁ソギ皿で、大窯IV期に編年されることから、1590~1600年代に比定できる製品である。7は備前焼の壺底部である。8・9は瓦質土器鉢の口縁部で、在地系の製品と考えられる。10は瓦片加工品、11は菱形唐草文軒平瓦の瓦当部である。12は五輪塔の空風輪で凝灰岩製、13は石臼の破片で、安山岩製である。



第145図 SF030出土遺物(1/3)

註 (1) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内4 中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第48次調査区』第1分冊(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第9集 2006年)

SF001 (第146図)・SF008

瓦敷道路

SF001・SF008は、SF030の上位に堆積する瓦敷きである。第48次調査では名ヶ小路の最終段階で道路中央部付近よりやや北側に瓦の小片を敷きつめ、一種の瓦敷き路面をなしていたことが確認されている²⁾。

SF001およびSF008はその瓦敷き街路の一部と思われ、両者とも検出面のレベルが標高約4.4mであることから、第48次調査の瓦敷き街路と同一遺構と推定される。なお、瓦敷きの部分はM11・L11区の一部に限られ、M11区以西には瓦敷きが認められないようである。

瓦敷き道路は石組溝や石列を潰して構築

両者は後述する石列SX014や石組側溝SD031の廃絶後、これらを完全に潰して構築されていたことが、検出レベルや層位から確認できる(写真図版30)。出土遺物については、瓦片の他にSF001から朝鮮王朝陶磁の舟徳利、SF008から京都系土師器の破片が出土している。

構築時期
17世紀初頭
～前半

瓦敷き街路の構築時期は、後述する石組側溝SD031が16世紀末葉から17世紀初頭であることから、17世紀初頭から前半頃に比定できる。

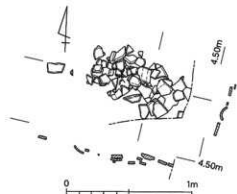
出土遺物は、第147図に示した。

14はSF001の出土遺物で、朝鮮王朝陶磁の舟徳利の底部破片である。多数の瓦小片と混在した状態で出土した。15はSF008の出土遺物で、京都系土師器皿である。出土状態は1と同じである。

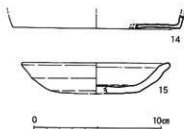
SD031 (第148図)

石組側溝

第2南北街路と名ヶ小路が交差する地点付近に構築された街路側溝である。側溝は北に約1.5m伸びた地点で西方向にL字状に屈曲する。屈曲部から西へは6.5mが確認されており、さらに調査区外に伸びる。調査区西段土層(第144図)でも街路遺構SF030を形成する整地層群を掘り込んで、SD031が構築されている状況が明瞭に確認できる。側溝SD031はK11区では堀方の壁面に石を立てて「石組側溝」とするが、J11区では壁面を小型の礫で補強するのみで、立石は認められないようである。

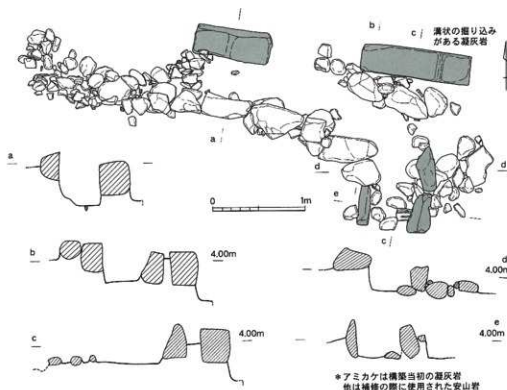


第146図 SF001実測図(1/30)



第147図 SF001・SF008出土遺物(1/3)
(14 SF001 15 SF008)

註 (2) 48次SF001、大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内4』第1分冊(2006年)174頁



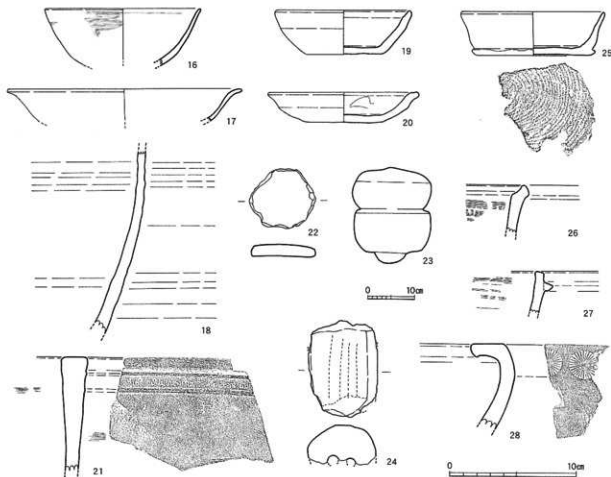
第148図 SD031実測図(1/40)

凝灰岩と
安山岩1回以上の
補修軟質施軸
陶器(図化
不能)の
出土・・・
1590年代
以降

石組の部分を詳細に観察すると、凝灰岩を用いた板石が使用されている部位と安山岩の礫が使用されている部位があり、安山岩の石材は凝灰岩の石組を補修する目的で使用されていることが観察できる(写真図版29・30)。つまり、当初において、石組溝は凝灰岩の板石のみで構築されていたが、一定の時間の経過後に損壊し、安山岩の礫で補修がなされたことがわかる。このように、石組溝には少なくとも1回以上、大規模な補修が行われていることが判明する。なお、屈曲部付近に使用されている凝灰岩製の加工石(写真図版30)には溝状の掘り込みが施されているが、この掘り込みの機能は不明である。SD031の南側の延長部は、第12次調査・第48次調査^{註)}でも検出されている。

SD031の構築時期は、内部から外面に白釉、内面に黒釉を施す軟質施軸陶器の底部(図化不能)が出土していることや延長部の第12次調査SD02の埋土中からも軟質施軸陶器が出土していることから、1590年代以降に比定される。つまり、天正14年(1586)の島津侵攻以降に構築された遺構である。さらに、すでに記述したように、石組溝の上位には瓦敷きの道路遺構SF008が石組を埋設するようなかたちで構築されており(写真図版30)、瓦敷き街路が機能している段階には、この石組溝は完全に廃絶または機能停止していることを確認している。従って、石組溝が実際に機能していた時間幅は極めて短かったと想定される。また、石組溝はその時期や層位から、後述する石列SX014と同時に存在した遺構と推定される。

註 (3) 12次SD02、48次SD002、大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内4』第1分冊(2006年)82・184頁



第149図 SD031出土遺物(1/3)

第149図はSD031からの出土遺物である。

16は樟州窯系青花碗、17は景德鎮系の白磁皿で、いずれも口縁部の破片である。18は中国陶磁の焼締陶器の胴部である。19・20は京都系土師器で、19は深手の坏、20は皿である。21は在地系の瓦質土器火鉢で、口縁部に二連雷文のスタンプ文（刻印）を押捺する。22は土師質土器片の再加工品である。23は五輪塔の空風輪で、凝灰岩製。24はフィゴの羽口と思われる土製品で、貫通孔が2箇所以上認められる。

25は土師質土器の坏で底部に回転糸切り痕が認められる。26・27は土師質土器の土鍋の口縁部である。28は瓦質土器火鉢で、浅鉢形の器形に復元される製品。口縁外面に菊花文のスタンプ文（刻印）が認められる。なお、25～28は14～15世紀代の遺物で、混入品である。

SX014

K11～L11区で検出された石列である。後述する堀SD025を完全に埋設した後に構築されている。基本的には礫を一段並べただけの石列であるが、L11区東側から調査区南東隅付近ではやや大型の礫を2～3段並べている部位もあり、礫のかわりに破損した石臼を使用した部位も認められる。

K11区では小型の礫が用いられており、石組溝に取り付く地点では壁手状の屈曲部も存在する。総延長は16.5mである。周辺の遺構の状況から、遺構の構築時期は16世紀末から17世紀初頭に比定される。名ヶ小路の北辺を形成する遺構で、時期や層位などから、石組溝SD031と同時に存在した遺

構築時期
16世紀末～
17世紀初頭
名ヶ小路
北辺を形成

構であろう。ちなみに、SX014が機能していた頃の名ヶ小路は北側は石列（72次SX14）、南側は側溝（12次SD02）といった施設を伴うものであったと推定される。

第150図はSX014の出土遺物である。

29は瓦質土器の火鉢または風炉で、胴部外面に菊花文を刻印する。菊花文は花の部位だけではなく、茎・葉なども表現されているようだ。14～15世紀代の製品と思われる、混入品であろう。30は土師質土器の再加工品である。31は中国陶磁の白磁皿の底部破片、32は景德鎮系青花皿で、小野分類E群に属する。33は五輪塔の空風輪で、凝灰岩を素材とする。34・35は安山岩製の石臼で、石列を構成する礎として二次転用されていたものである。

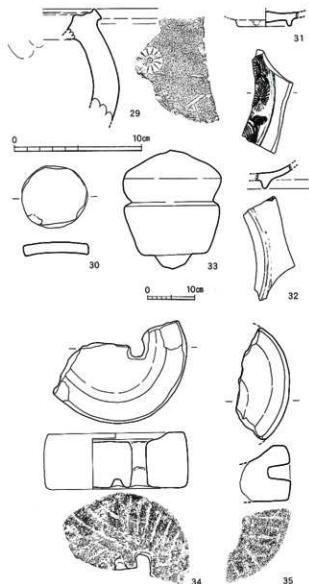
(2) 堀

SD025

第72次調査で検出されたL字状に屈曲する堀である。遺構検出当初の段階では、当該遺構が一連の同一遺構と考えて遺構番号の設定を行った。ところが、遺構の掘り下げと同時にサブレンチによる土層確認を行ったところ、L字状に屈曲する15世紀後葉（寺院〔称名寺〕段階）の堀と、同じくL字状に屈曲する16世紀後葉から末葉（大規模施設段階）の堀という、時期を違えた大規模な2つの堀が重複して掘削されており、さらにそれぞれの堀に複数の掘り直しが認められることが判明した。そこで土層観察用のベルトを4箇所を設定し、遺構内部の土層地積状況を図示した（第151・152図）。ここでは16世紀後葉から末葉の堀をSD025A、15世紀後葉の堀をSD025Bとして、以下の記述を進めていきたい。

16世紀後葉から末葉の堀SD025Aは、断面がV字状を呈する菜研堀である。堀の上面幅は約3.6m、深さは約1.9mを測り、東西23.5m、南北10.0mにわたって検出した。堀はJ10区の南東隅付近でL字状に屈曲し、名ヶ小路SF030の形成土層群を切って構築されている。南北方向の堀は後述する15世紀後葉の堀SD025Bより外側に位置しており、16世紀後葉に堀で囲まれる敷地を西側に拡張したことになる。

遺構内部の土層群は、土層①から③の部位（東西方向の堀）では、堀が機能していた時期のグライ化した青灰色の土層群（下層）、堀の機能停止直後に多量の瓦や礫・石塔類を廃棄した土層群（中



第150図 SX014出土遺物(1/3)

L字状に
屈曲する
2つの堀

16世紀後半
から末葉の
堀・・・
SD025A

15世紀後半
から末葉の
堀・・・
SD025B

層)、中層の堆積終了後に堀を完全に埋設した茶褐色系の土層群(上層)の3つに大別される(第152図)。土層④の部位(南北方向の堀)では、SD025Aの改修(掘り直し)の痕跡が認められ、下層に相当する土層群には炭・灰の堆積や小型巻貝のブロック・細砂層などが複雑に堆積しており、上層に相当する部位には、堀の埋没後に生じたと考えられる浅い窪みを埋め戻したと考えられる砂質土と粘質土なども確認された。

下層の遺物
出土状況

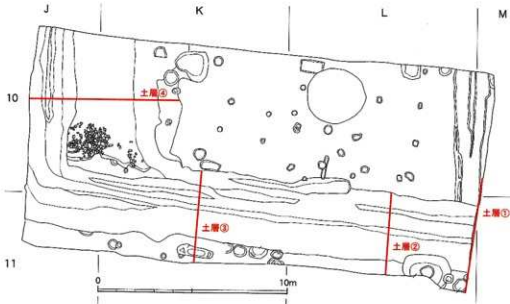
ウシ

下層を構成する土層群はグライ化が著しく、水が一定量溜まった滞水の状態を示している。層中からは獣骨類・貝類や木器類、内部に灰が入った状態の京都系土師器皿、釣手金具が付いた状態の瓦質土器羽釜など、多量の遺物が出土した。また、J10区では頂頭部に円形の孔を穿たれたウシの頭骨(写真図版34)、J10・J11区の境界付近ではウシの胸椎・肋骨がつながった状態のままで見えられた(写真図版34)。さらに、K11区でもウシの四肢骨や頭骨が散在した状態で出土している(写真図版35)。ウシをはじめとした獣骨類が堀の内側(屋敷側)から捨てられたのか、外側(街路側)から捨てられたのかという点を判断するのは、第72次調査の所見のみでは判断が難しい。土層④における小型巻貝(イボキサゴ)のブロックは堀の内側(屋敷側)からの廃棄状況を示しているようにも見える。しかしながら、本調査区の北側に位置する第80次調査(本書第5章)では土層の堆積状態や遺物の接合関係から、明らかに堀の外側(街路側)からの廃棄状況を示している所見も得られている。従って、第72次地点付近では、SD025下層出土遺物の大半は堀の外側(街路側)から廃棄がなされ、一部は堀の内側(屋敷側)からの廃棄もあったと考えておきたい。

中・上層の
遺物出土
状況

中層・上層では多量の瓦が出土したほか、K10区で石塔類や完形の丸瓦が出土する地点が認められた(写真図版33)。石塔類等は出土状態からみて、明らかに堀の内側(屋敷側)からの廃棄である。石塔類は部位がバラバラの状態であり、地輪も少数存在するものの、火輪・水輪・空風輪が多い。これについては、建築部材として再利用しやすい地輪を確保し、使用しにくい火輪・水輪・空風輪などを選択して廃棄した可能性がある。また、多量に出土した瓦類の中には、鯉瓦(第192図479・480)と推定される破片(一部は下層出土)があり、注目される。堀の埋土中から出土した鯉瓦は第72次調査のみに存在⁴⁾し、同一遺構の延長部が検出された第80次調査・第11次調査・第88次調査

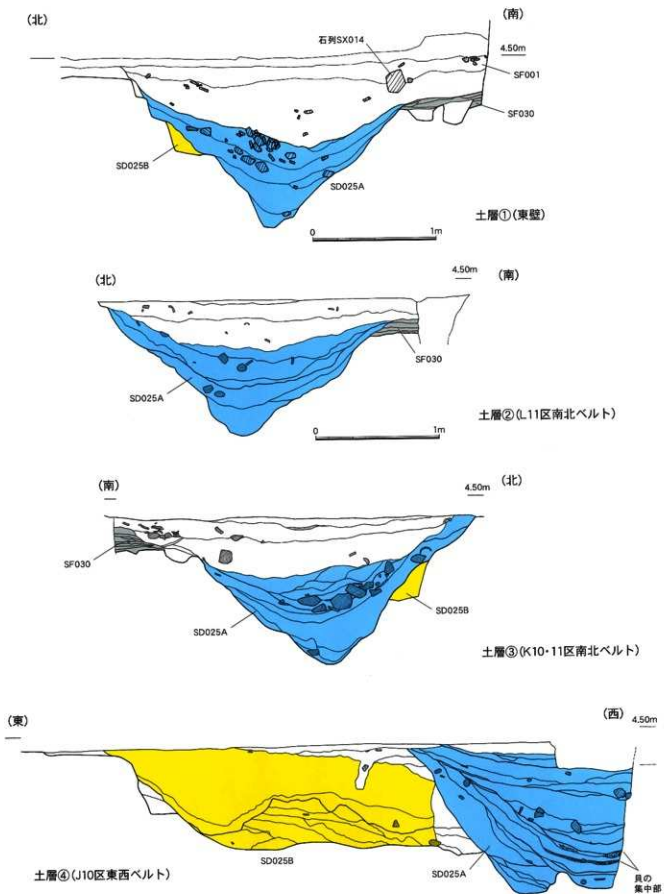
鯉瓦の出土



第151図 SD025土層図の位置(1/200)

注 4) 鯉瓦と思われる破片は、第18次調査の包含層・敷地層でも1点が出土している。本来、称名寺で使用されていた鯉瓦が二次的に移動したものと考えられるが、第72次調査SD025の出土資料とは形態が異なる。

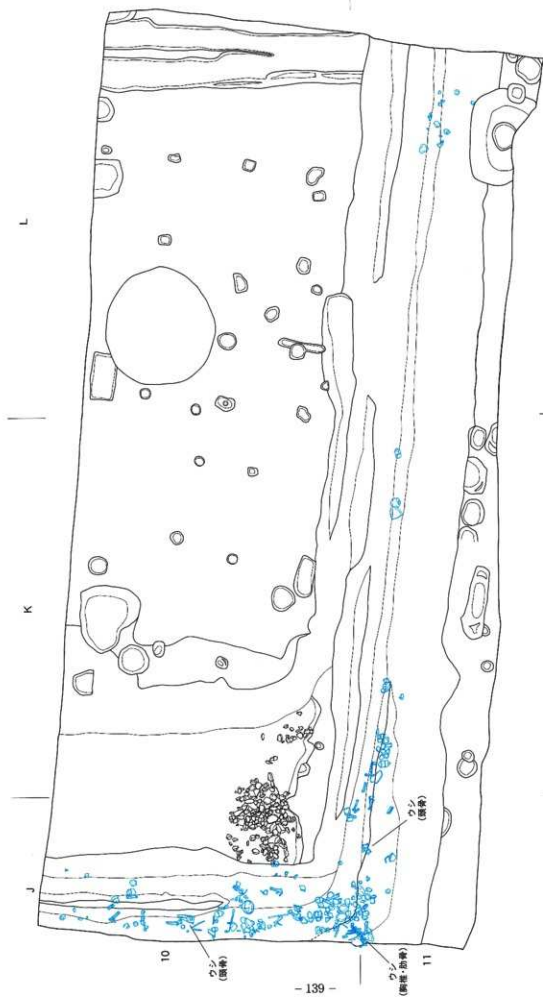
大分県教育庁歴史文化財センター『豊後府内4』第2分冊(2006年)182頁、第181図294



第152図 SD025土層図(1/60)



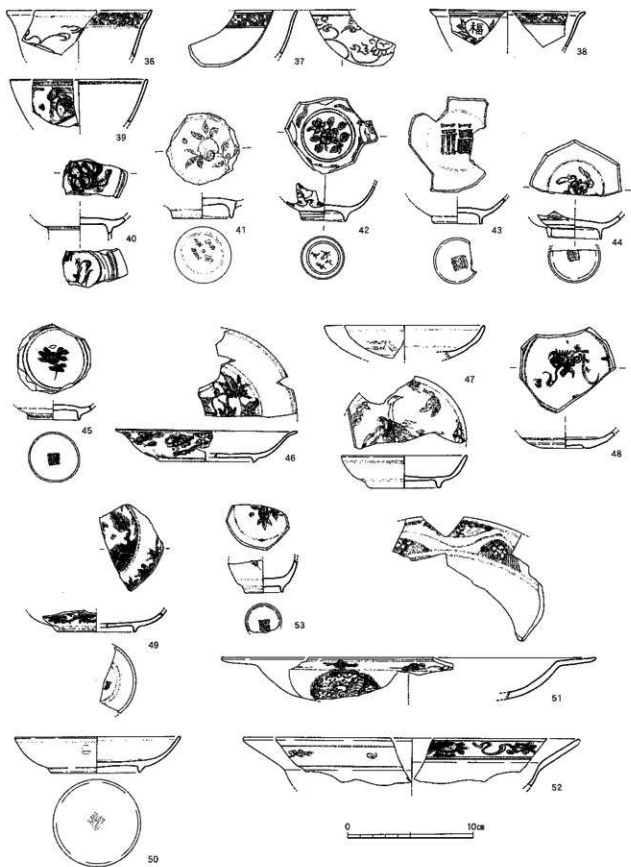
第153図 SD025遺物出土状況土層図①(1/100)
 上層(堀の機能停止後・埋め立て時)



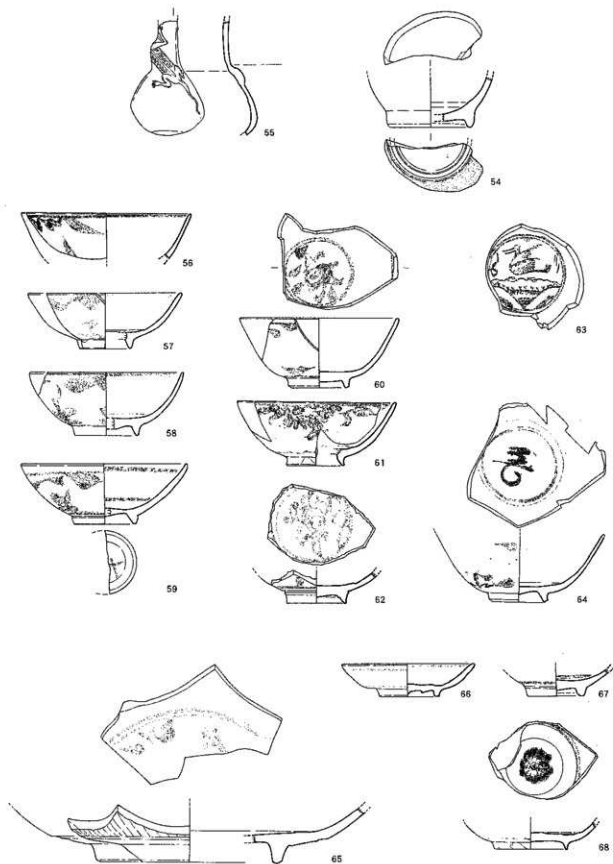
第154図 SD025遺物出土状況土層図②(1/100)
下層(薪の機能時)

- における堀の中からは出土していないようである。
- SD025Aの
構築年代 SD025Aの構築年代であるが、下層から漳州窯系青花が一定量出土しており、その掘削年代は1570年代を遡らないと考える。上層からは唐津焼や軟質施釉陶器、瀬戸美濃系の大窯Ⅳ期の折縁ソギ皿が出土しており、SD025の最終的な埋没年代は1590年代以降以降に降ることがわかる。なお、第72次調査では堀の埋土中に島津侵攻時の焼土層（天正14年〔1586〕）は確認されておらず、SD025の埋土群と焼土層との関係は不明である。しかしながら、第80次調査での所見や出土遺物などを考慮すると、下層は1570年代から1586年以前、中層は1586年前後の時期、上層は1590年代と推定される。堀の機能の時間幅は15年程度しかなく、その中で少なくとも1回以上の改修（掘り直し）が行われていることが確認できる。
- SD025B 15世紀後葉の堀SD025Bは16世紀後葉から末葉の堀SD025Aと切り合い関係を有する。幅幅は切り合いにより明らかではないが、深さは1.1～1.3mを測る。K10区でL字状に屈曲し、南北6.5m、東西16.0mが検出された。東西方向の堀はSD025Aとはほぼ同じ位置に構築されているが、南北方向の堀はSD025Aより内側に位置している。
- 土層 土層①と③では、16世紀代の堀に切られて大半は消失してはいるものの、断面に僅かに残存していたSD025Bの堀方が確認できた。また、土層④の観察所見では、SD025AとSD025Bとの明瞭な切り合い関係を確認した。しかしながら、SD025Bの埋土は上位に埋め戻し時に形成されたと思われる茶褐色系の一括埋土を認めるものの、堀の改修（掘り直し）についてははっきりしない。土層④で認められる下層の堆積層は粘質土と粒子の粗い砂質土との互層となるが、この部位は堀に先行する大型遺構（土坑？）などの埋土であるかもしれない。堀の埋土はグライ化が認められず、常時水が溜まっていたとは考えられないことから、SD025Bは空堀であった可能性が高い。
- SD025Bの
構築年代 出土遺物は僅少で、第72次調査ではSD025Bの時期を判断する良好な遺物はなかった。しかし、北側の80次調査SD200^mで、備前焼鉢・瓦質土器輪・白色系（大内系）土師質土器皿・土師質土器燗台などが出土したことから、堀の構築年代は15世紀後葉に比定されることが判明した。
- 出土遺物
景徳鎮系
青花 SD025から出土した多量の遺物を、以下で報告する。出土遺物は第155～211図に提示した。第155図では、景德鎮系青花の製品を图示している。
- 36～38は口縁部が端反となるタイプの青花碗である。36・37は外面に毛彫り文様、口縁内面に四方博文が描かれている。38は外面に草花文と丸文内に「福」字が描かれ、口縁内面に四方博文が認められる。39～45は饅頭芯筒で小野分類E群青花碗に分類されるもの。見込みに「福」字（43）や外底部に「大明年造」（40）・「富貴長命」（41）・「天下太平」（42）銘、異体字銘（43～44）の裏底銘を有する資料がある。
- 46～52は青花皿で、46は小野分類B1群青花皿、47～48はC群青花皿、49～50はE群青花皿、51・52はF群青花皿である。なお、49の裏底銘は「富貴佳器」、50は異体字銘である。
- 53は青花の小杯で、口縁部を欠損しているが、外底部には「福」字の裏底銘を有する。
- 第156図54は瓶の底部から胴部下半にかけての破片で、景德鎮系の磁器製品である。外面に瑠璃釉、外底部に透明釉が施されている。内面と高台畳付け部周辺は露胎となる。
- 中国南部の
陶器類 55も小型の瓶で、胎土は鉄分の強い赤褐色を呈する。頭部から胴部上位にかけて蛟龍または小動物（栗鼠？）の貼付文があり、貼付文は型打ち整形によって作出されている。外面には赤褐色を呈する胎土に白化粧土を施した後、紫紅釉というべき深紫色の釉を施す。内面は露胎となっている。施された釉色こそ異なるが、胎土の状況や施釉のあり方などは華南三彩の製品群と共通するものである。出土例の少ない特殊な製品で、中国南部の陶器と推定される。
- 紫紅釉（？）

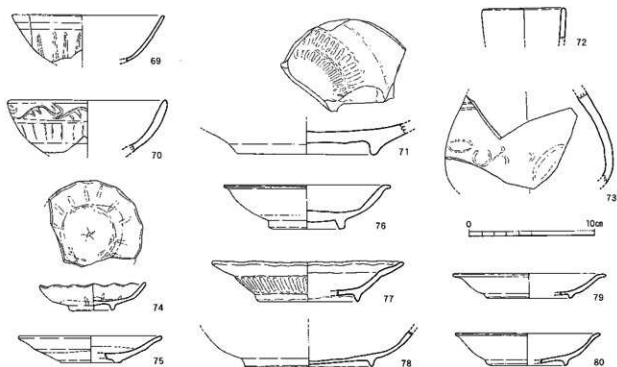
註 (5) 本書第5章402頁参照。



第156図 SD025出土遺物①(1/3)



第156図 SD025出土遺物①(1/3)



第157図 SD025出土遺物③(1/3)

神州窯系
青花

56～68は神州窯系青花の製品を图示している。

56～64は神州窯系青花の碗である。このうち56～62については、外面と見込みに草花纹、口縁内面ないし見込み内面に一条の圈線が描かれる、神州窯系青花碗としては最もポピュラーな製品のひとつである。59の外底部には墨書が認められるが、破損のため、その意味は不明である。63は残存部の外面は無文で、見込みには鳥文が描かれる。64の見込みに脱化した「寿」字が描かれている。

外底部に
墨書

65～68は神州窯系青花皿で、65は外面に鎮文を有する大皿、67・68は中型の皿である。

青磁・白磁

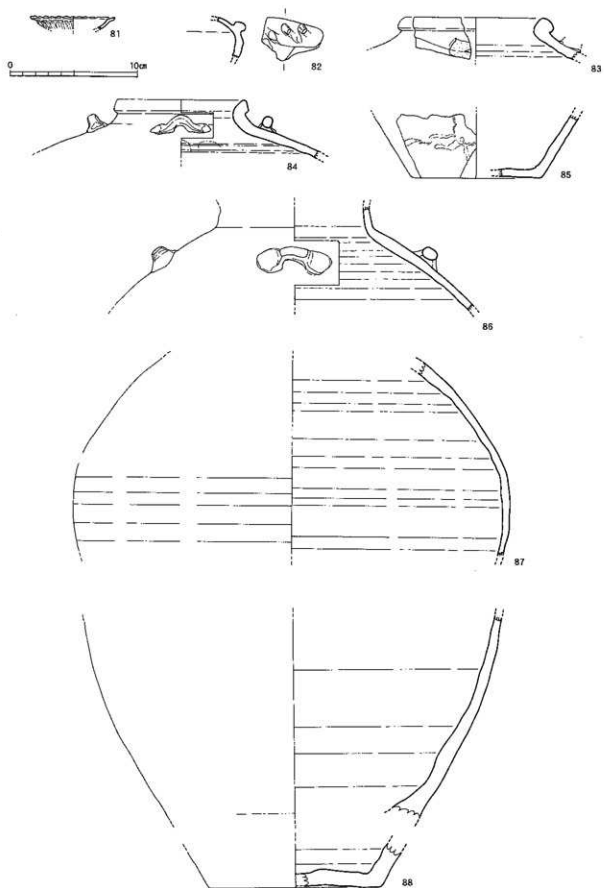
第157図69～73は中国龍泉窯系の青磁である。69～70は青磁碗、69は外面に刻線を施し、蓮弁文の鏡を表現している。70は口縁外面に唐草文、胴部外面に蓮弁文を施している。71は内面に鎮文を有する大皿、72は香炉の口縁部、73は外面に片彫りの花纹を有する瓶である。

74～80は中国陶磁の白磁皿である。74は胴部外面に鎮文を有し、口縁が屈曲して輪花となっている。75は内底部と高台付近が露胎となるタイプの白磁皿で、その製作年代は16世紀中葉頃まで遡る。76は口縁端部が外反し、高台付近が露胎となる。74～76は中国南部のものである可能性が高い。77は口縁部が輪花となり、胴部外面に鎮文をもつ。78～80は口縁部が端反となる森田分類E群に属する製品の底部で、78はやや大型のサイズとなっている。これらは景德鎮系の製品と推定される。

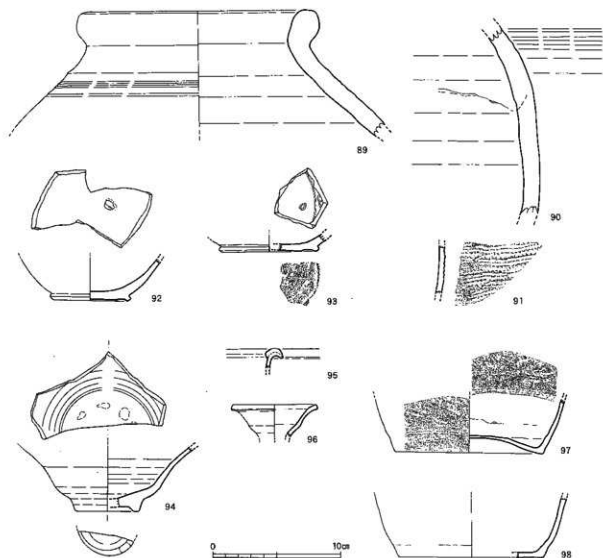
第158図は中国陶磁である。

陶磁製品

81は中国陶磁の青釉小皿の口縁部で、底部は欠損している。82は器種不明で、外面に薄緑色の釉が施されており、内面は露胎となる。水注などの袋物であろうか。肩部付近の破片で、外面に3箇所認められる突起は把手の部位の一部か。83～88は褐釉陶器の四耳壺である。このうち、86～88は同一個体の可能性があり、堀SD025・街路遺構であるヶ小路SF030・石組側溝SD031出土の破片が接合した遺構間接合の資料である。



第158図 SD025出土遺物②(1/3)



第159図 SD025出土遺物⑤(1/3)

東南アジア
陶磁・土器

第159図89～98は東南アジア陶磁器・土器である。89・90はタイメナムノイ窯系の四耳壺で、89は口縁部、90は胴部である。91はタイ陶磁（アユタヤ）の土器ハンネラ壺で、胴部外面に特徴的な細かい明きが認められる。豊後府内においてハンネラ壺の出土例が確認されるのは僅少で、筆者が把握しているものは、第72次のほか、中世大友府内町跡第5次B調査⁽⁶⁾・同31次調査⁽⁷⁾の3地点に留まる。92・93は北部ベトナム陶磁の白磁碗で、いずれも内面に大型の目跡を有する。

朝鮮王朝陶
磁

94～98は朝鮮王朝陶磁である。94は灰青沙器碗で、体部外面の高台付近に僅かにふくらみを持ち、見込みの目跡が大型で少ないことから、「蕎麦茶碗」に類似する形式である。しかしながら、見込みに明瞭な段（鏡あるいは茶溜り）を形成していないことが伝世品とは異なっている。95は鉢（片口）の口縁部、96～98は舟徳利である。

注 (6) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内1 中世大友府内町跡第5次・第8次調査区』（大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第1集 2005年）355頁、第476図22～25

(7) 同『豊後府内5 中世大友府内町跡第31次調査区（瑞光寺周辺）』（大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第10集 2006年）31頁、第34図13

土師質土器 第160図99～第161図150は京都系土師器の皿である。いずれも埴地編年2期から3期に分類される資料である。上・中層(99～112)・下層(113～139)・層位不明(140～150)に分けて図示してみたが、層位で顕著な型式差は認められなかった。また、下層出土の138・139は内部に灰が入り、並んだ状態で出土した資料である(写真図版33)。

内部に灰が入った状態で出土した京都系土師器皿

第161図151～第162図168は在地系の土師質土器皿もしくは杯である。このうち、160～163は在地系のいわゆる「ロク目土師器」皿で、15世紀末から16世紀前半に盛行する資料であるが、16世紀代にも継続して生産されている。151～159および164～168は14～15世紀代に比定される資料と思われ、混入品であろう。

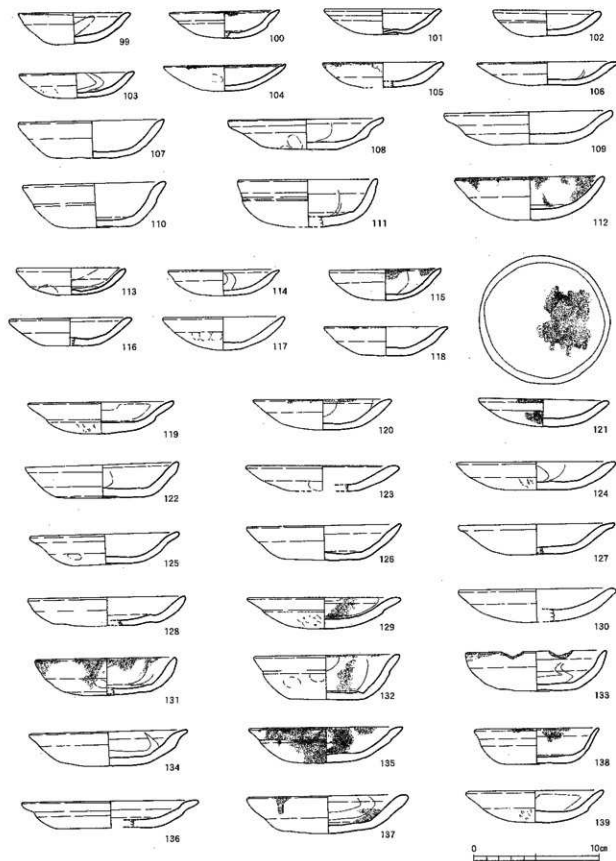
169・170は土師質土器湯台で、色調は赤褐色を呈する。底部に糸切り痕をもち、短めの脚部を有するタイプである。SD025上層からの出土であるが、遺物の年代観から、本来は15世紀後葉の埴地SD025Bに属する遺物なのであろう。171も土師質土器湯台であるが、こちらは色調が黄褐色で、長めの脚部を有し、底部には糸切り痕が認められない。京都系土師器が出現して以降の16世紀代の製品である。172は吉備系土師器碗で、14世紀初頭に比定される吉備地方からの搬入品である。遺物の年代と合わないことから、混入品であろう。173は土師質土器の大型製品であるが、器種不明である。中世大友府内町跡の既往の調査例から、14世紀代の製品と推定される。174は焼塩釜で、16世紀末葉の製品である。

瓦質土器

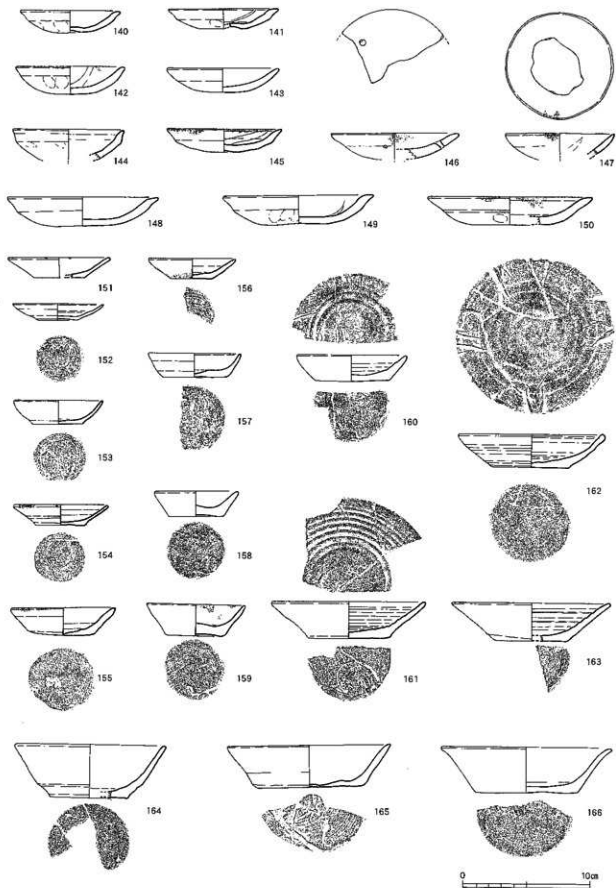
第162図175～第166図241は、瓦質土器である。175～183は在地系の長胴形火鉢で、外面に貼付した2条の突帯間に、横長の雷文または二連雷文もしくは双頭蕨手文の刻印を押捺する。16世紀末葉の製品である。184は退化した菊花文の刻印を有するもので、口縁部の形態が175～179と異なるが、これも16世紀末葉に比定される。185も在地系の火鉢の口縁部であろう。186～192も火鉢で、口縁部外面の2条突帯間にスタンプ文を有するもの。191・192には刻印が認められない。193は瓦質土器の破片で、胴部外面に菊花文を刻印する。194は火鉢類の脚部である。195・196は浅鉢形の火鉢の口縁部で、195には巴文、196には大型の雷文を刻印する。197は短く屈曲する口縁部と肩の張る器形を呈し、肥厚した口縁上面に平坦面をもつもので、これも火鉢の器形の一つである。防長地区や北部九州で類似した器形の火鉢が認められるが、豊後府内でも出土事例が増加していることから在地系の製品であるかもしれない。198は外面に多条沈線を有する胴部の破片。199・200は香炉で、199は無文であるが、200は口縁外面に双頭蕨手文を刻印する。201・202は内型作りによる在地系の瓦質土器碗である。203は瓦質土器であるが、双耳の部位に釣手金具が装着されたままの状態出土した羽釜である(写真図版33)。釣手金具は鉄製で、J字形に曲げられており、先端部が若干広くなる。この部位に金属製の針金などを巻き付けて吊したものと思われる。204も瓦質土器の口縁部で、これも羽釜の口縁部である可能性が高い。205は外面に断面方形の突帯を有し、突帯上に雷文、突帯下に蓮弁文を刻印する。類似例の出土資料が増えてきており、花瓶の一部である可能性も考えられるが、完形資料の出土がなく、器種不明である。206～208は風炉と思われる資料で、体部に窓を有することがわかる破片である。また、206には脚部と底部の接合を強固にするため、接合面に沈線を施す工夫がなされている。209は器種不明の胴部で、肩部の突帯間に刻印を有する。210・211は東播系の握鉢で、製作年代は14世紀代である。遺物の年代が合わないため、混入品であろう。212は土鍋で、胴部中位に断面台形の突帯を有し、底部には叩きが認められる。213は握鉢で、内面に楕円、外面に板状圧痕が認められる。見込みの部位を残して円形に加工しているが、その用途は不明である。214～217も火鉢類の破片である。214は胴部で六角形をモチーフとした刻印を施している。217は脚部の破片である。218・219・221は土鍋の口縁部で、いずれも14世紀代に比定される混入品であろう。220は器壁が薄く、ゴマを煎る時などに使用する焙烙であろう。222は土鍋の脚部で、防長系のものである可能性がある。223～225は口径の大きな広口釜で、在地系の

釣手金具が装着されたままの状態出土した瓦質土器羽釜

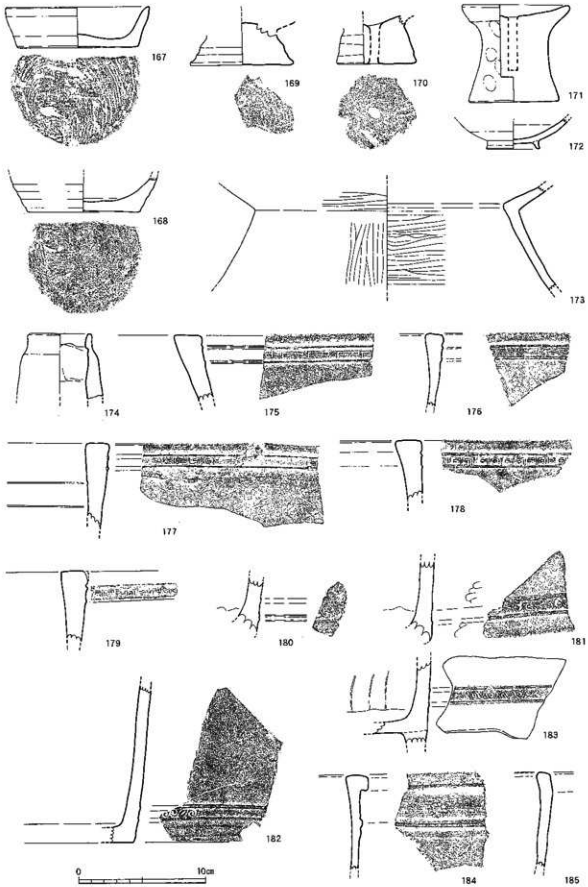
見込みの部位を残して円形に加工した瓦質土器握鉢



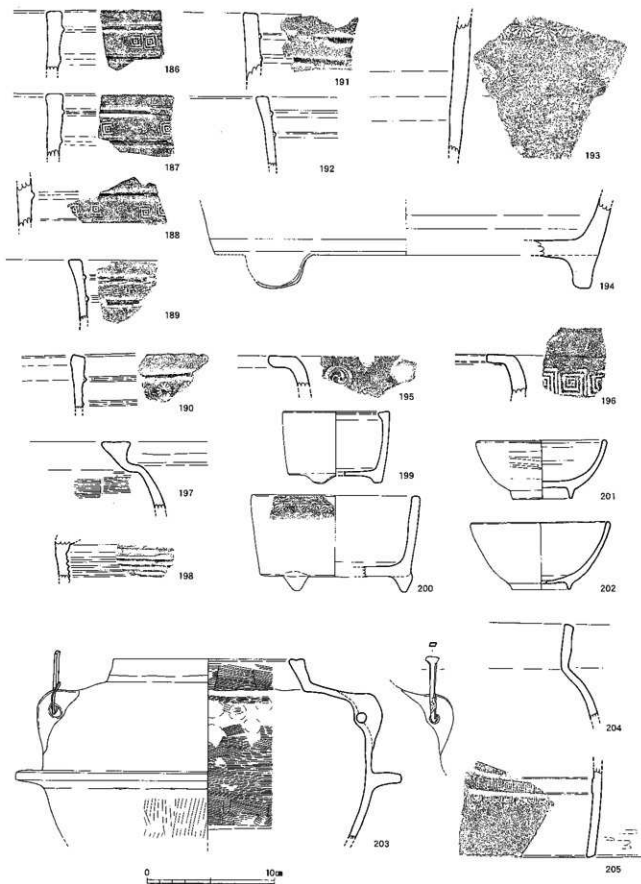
第160図 SD025出土遺物⑥(1/3)



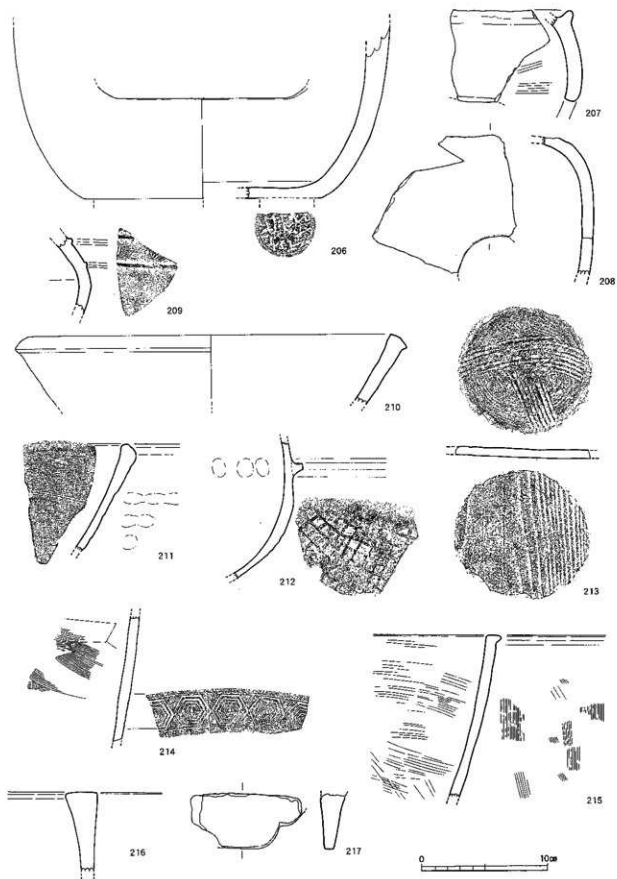
第161図 SDC25出土遺物⑦(1/3)



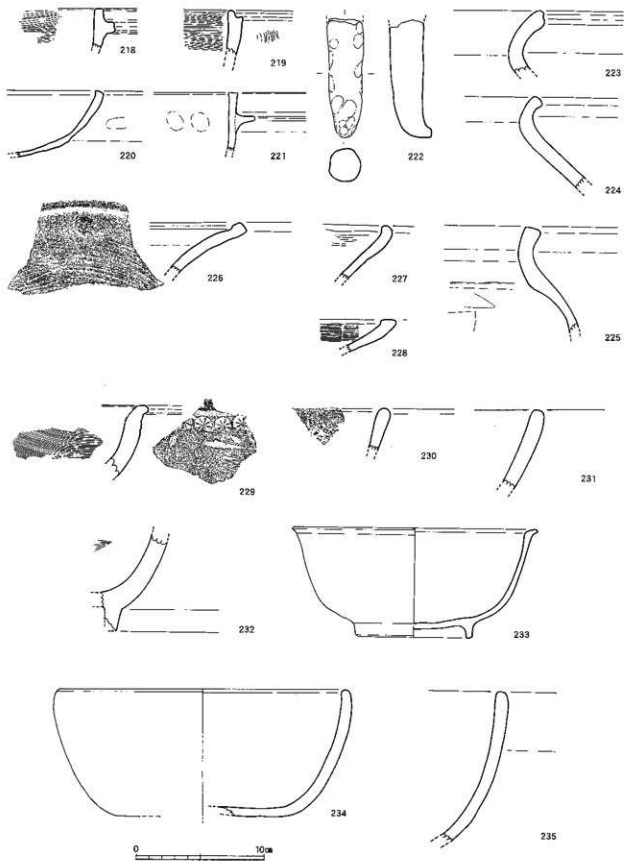
第162図 SD025出土遺物⑧(1/3)



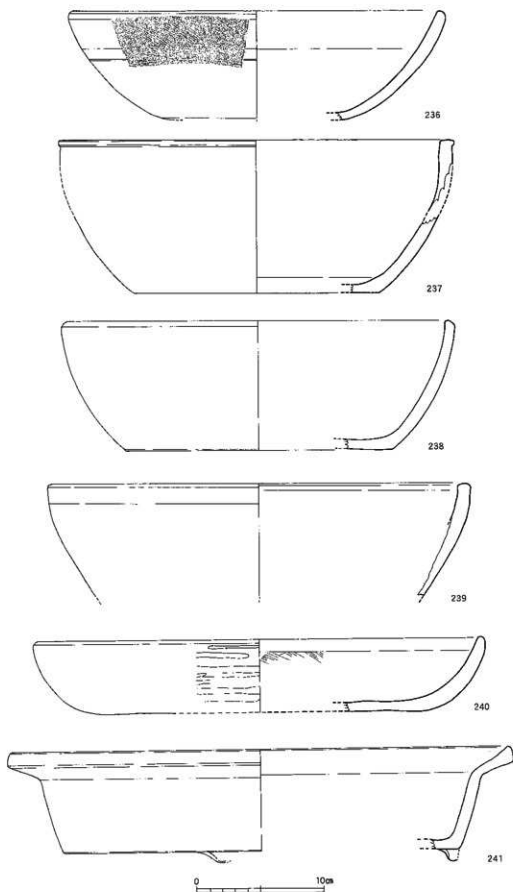
第163図 SD025出土遺物①(1/3)



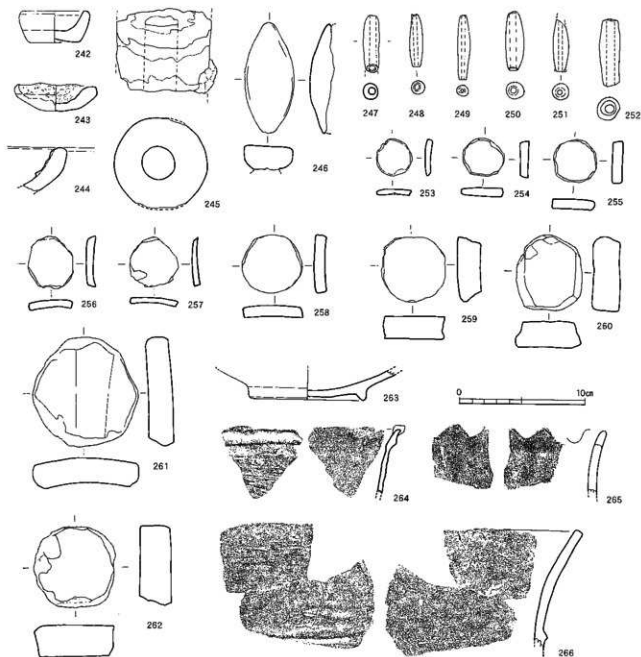
第164図 SD025出土遺物⑩(1/3)



第165図 SD025出土遺物①(1/3)



第166圖 SD025出土遺物⑫(1/3)

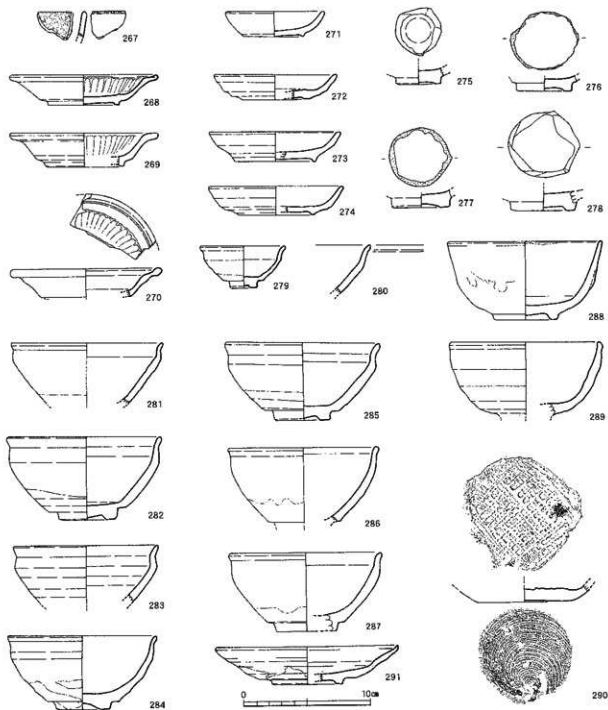


第167図 SD025出土遺物①(1/3)

瓦質土器であろう。226～228は鉢の口縁部であろうか。229・230も鉢で、229は口縁部外面に退化した菊花文のスタンプ、230は口縁部内面に格子状の沈線を施す。232～235は16世紀代に比定される在地系の鉢で、232・233は高台を有するが、234は高台のない平底となる。236～241も鉢で、在地系の製品。ほとんどが16世紀代に比定される資料である。

第167図242は土師質土器であるが、用途不明の小型の製品である。243・244は取瓶、245はフイゴの羽口である。246は有溝土鉢の破片で、土鍾としては中型の製品となる。247～252は小型の管状土鍾。253～262は土師質土器や瓦質土器、または瓦を円形に再加工した製品である。

263～266は縄文土器である。263は底部、264は無刻目突帯とヒレ状突起を有する。265は波状口縁を呈し、266の頸部には隆帯もしくは無刻目突帯が施されている。いずれも縄文時代晩期の土器で、混入品である。



第168図 SD025出土遺物⑧(1/3)

軟質施釉
陶器
瀬戸美濃系
陶器

第168図では、関西系の軟質施釉陶器・瀬戸美濃系陶器・唐津焼を図示した。

267は軟質施釉陶器碗の口縁部で、外面に白釉、内面に黒釉が施されている。268～270は瀬戸美濃系の製品で、大窯IV期の折縁ソギ皿である。271～274は瀬戸美濃系の小皿である。275～278は天目碗の底部で、高台部をきれいに残していることから、意図的な再加工品であろう。279は小型の天目碗、280～289は天目碗、288・289は碗（丸碗）である。290は卸皿で、14～15世紀の製品であることから、混入品であろう。291は唐津焼の溝縁皿で、1600～1630年代の製品である。内外面に灰釉を施し、高台付近と外底部は露胎となる。見込みに目跡は認められない。なお、267の軟

質施釉陶器、268～270の折縁ソ平皿、291の唐津焼清縁皿は1590年代以降の製品であり、いずれも出土地点はSD025上層に限られている。従って、これらの資料はSD025の最終的な埋設時期を示唆する遺物と解釈できる。

備前焼・
常滑焼

第169～174図では、備前焼（292～355）および常滑焼（356～357）を図示した。

292～302は播鉢で、292～297・299・300が近世1期（16世紀末葉）、298・302が中世6期（16世紀前葉から後葉）、303が中世3期（14世紀前葉）に分類される。近世1期の製品が遺構の時期を示す遺物であろう。

304～322は大甕である。口縁部が残存するものうち、304～309が近世1期、310～312が中世3～4期（14世紀から15世紀前葉）、313が中世5期（15世紀後葉）に分類される。また、283には外面にヘラ記号と文字の一部（？）が認められる。

備前焼鉢子
（製品）

323は鉢子で、把手の大部分を欠損するもの、それ以外は残存している。底部には竹管を押しつけたような円形の記号が施されている。把手の基部には鋳を打ったような特徴的な表現がみられ、金属製の鉢子を焼物で写した優品と考えられる。SD025下層からの出土で、製作年代は1580年代以前に遡り、このような製品が天正年間頃にはすでに製作・流通していることを確認しておきたい。遺跡からの出土事例は少ないと思われるが、美術書などには類例が認められる⁹⁾。また、中世大友府内町跡第12次調査で、同様な形態の把手基部の小片が1例のみ出土している⁹⁾。

324・325は德利（瓶）で、同一個体と推定されるが、接合しない。326は掛花入で、口縁部に貫通孔をもつものと推定されるが、当該部位を欠損している。327～330・332～336は壺類である。

328と329の肩部には櫛播波状文が施されている。また、327の肩部外面、330の胴部外面、338の底部にはヘラ記号があり、337の底部には糸切り痕が認められる。331は長胴形の鉢と思われ、胴部と底部の境界になる稜線の部位にヘラ削りを施しており、狭い面をなしている。

340～342は水屋甕の口縁部と思われる。

343～346・348は鉢である。347・349～355は壺類の底部と思われる破片で、347の底部には刷毛目状の工具を使用した調整痕が残る。

356・357は常滑焼大甕の口縁部である。14世紀代の製品であるため、混入品であろう。

第175～193図では、瓦類を提示した。

軒丸瓦

358～410は軒丸瓦である。軒丸瓦の瓦当文様はすべて巴文で、巴の回転方向、尾部の特徴、珠文数などにより分類が可能と思われるが、今回は時間的・資料的な制約から分類ができていない。SD025出土の軒丸瓦については、8種類以上に分類可能と思われ、小破片についても可能な限り図化を行い、実測図の提示に努めたが、分類案などの詳細は今後の課題としておきたい。

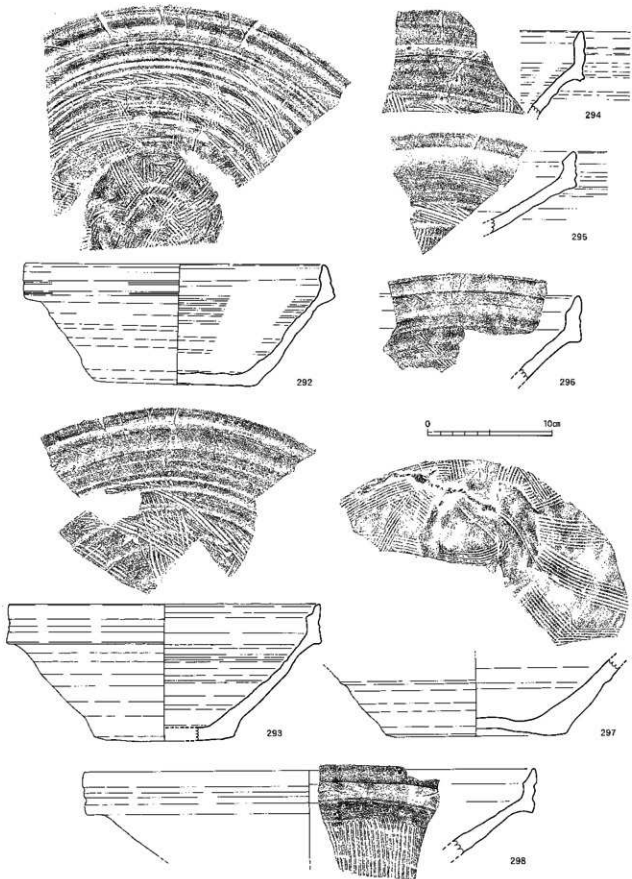
このうち、363は瓦当部が完存している資料である。瓦当文様である巴文は左回転で、尾部は短く、互いがに引っ付き、内区の圏線となる。巴文周囲の珠文数は17を数える。巴文の太さが太いことや尾部が短いことなどから、豊後府内では比較的新しい段階の軒丸瓦と推定され、他の調査地点の事例などから後述する宝珠唐草文軒平瓦（第182図452）などとセットになる可能性を考えている。当該軒丸瓦の製作年代は、16世紀後葉以降と推定される。

なお、394は軒丸瓦の丸瓦部であるが、瓦当との接合面に沈線が施しており、接合を強固にする工夫が認められる資料である。

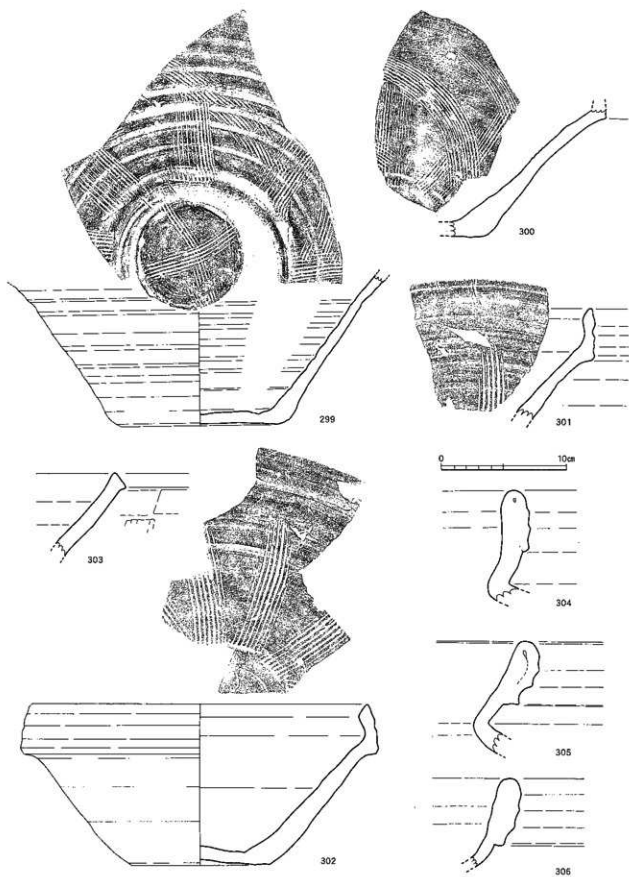
註 (8) 林家明三『日本の陶磁6 備前』(中央公論社 84頁)

岡山県教育委員会『木村コレクション古備前陶器』(1984年)

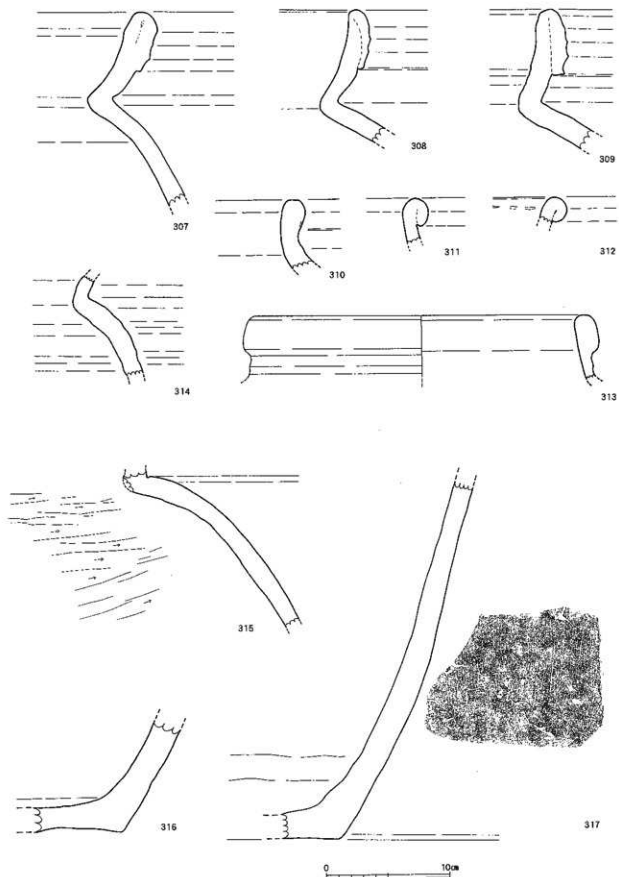
(9) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内4』第1分冊(2006年大分県教育庁埋蔵文化財センター)112頁、第101図18



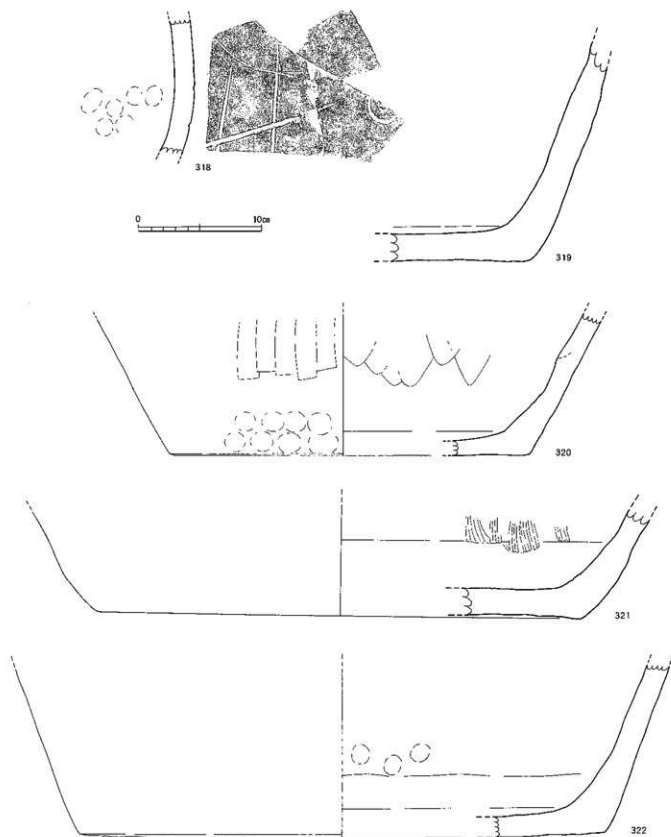
第169図 SD025出土遺物⑤(1/3)



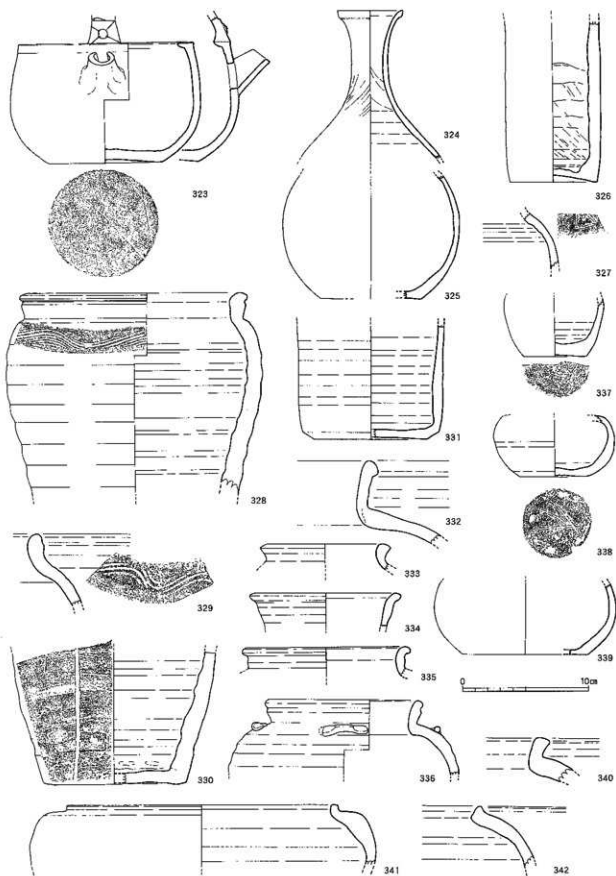
第170図 SD025出土遺物⑧(1/3)



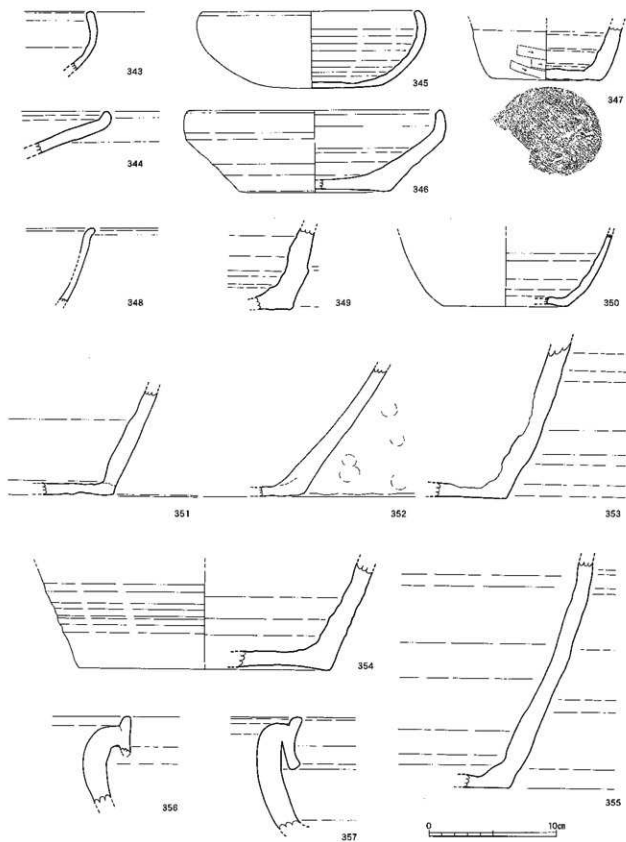
第171図 SD025出土遺物①(1/3)



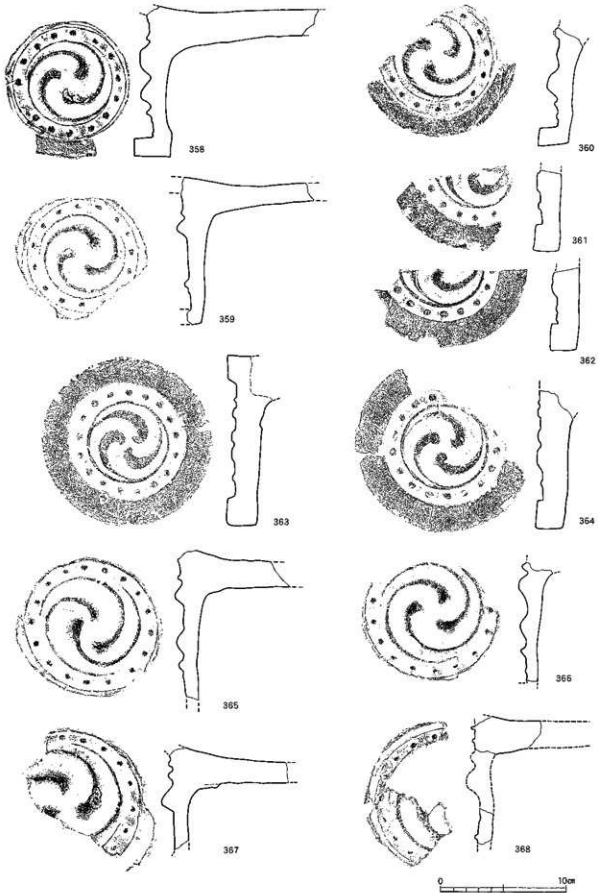
第172図 SD025出土遺物⑩(1/3)



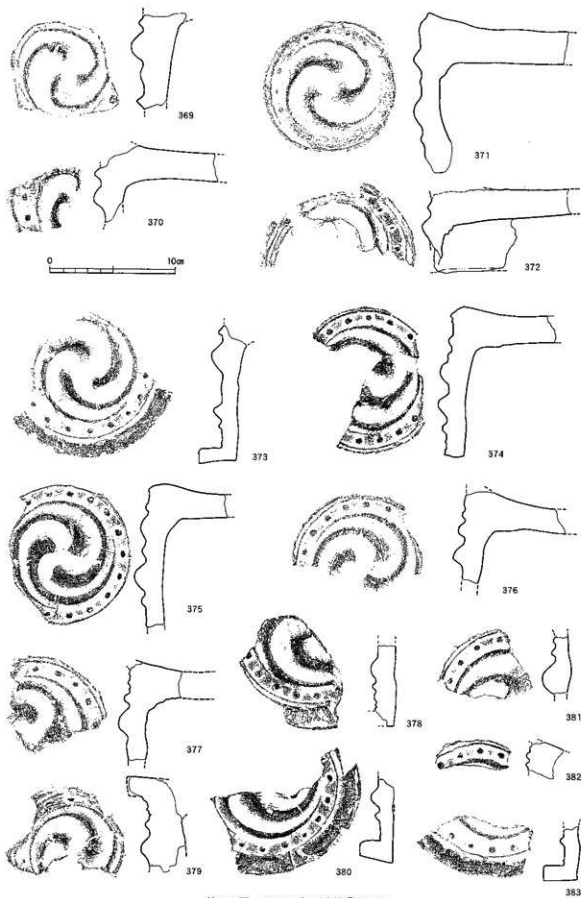
第173図 SD025出土遺物⑨(1/3)



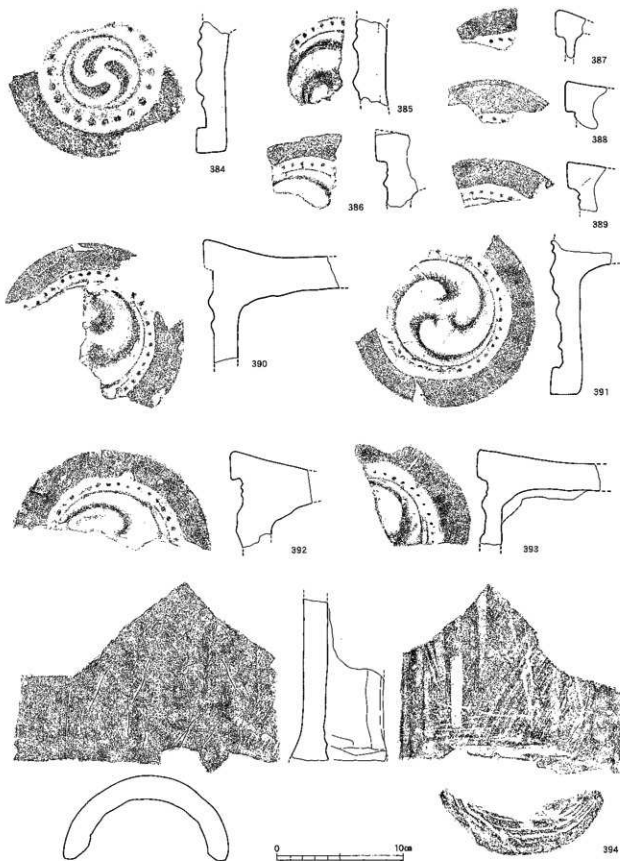
第174図 SD025出土遺物㊸(1/3)



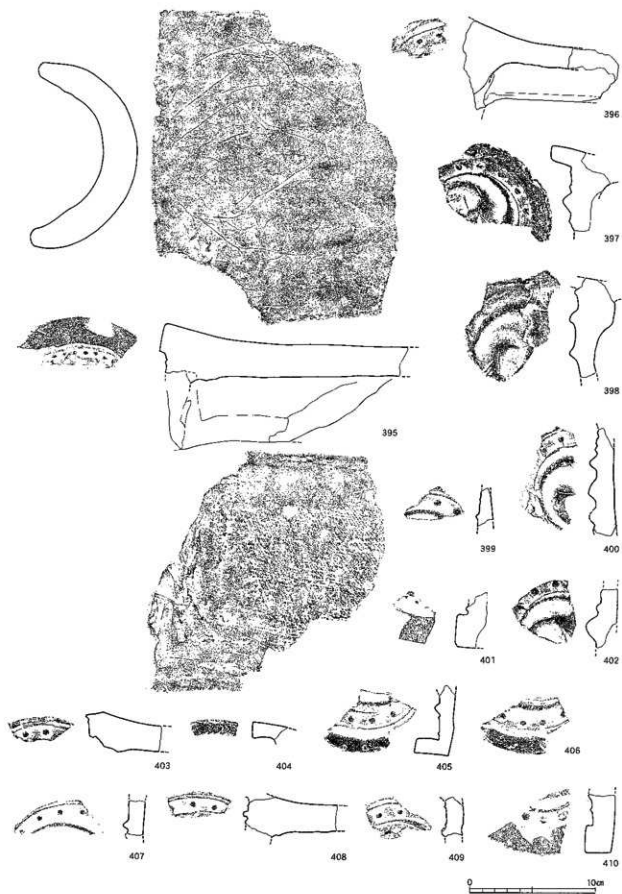
第175図 SD025出土遺物②(1/3)



第176図 SD025出土遺物②(1/3)



第177圖 SD025出土遺物②(1/3)



第178図 SD025出土遺物群(1/3)

- 軒平瓦 411～455は軒平瓦である。軒平瓦は瓦当文様が特徴的であることから、小片でも分類可能な場合が多い。そのため、今報告に当たっては小片であっても、図化を行い、そのすべてを提示している。SD025出土の軒平瓦は以下の9種類に分類できる。
- 蓮華唐草文軒平瓦(411～423)；瓦当文様は蓮華文を中心飾りにもつ均整唐草文。唐草文が展開する中途に「蕾(つぼみ)」の表現があり、特徴的である。出土数は後述する菱形文軒平瓦に次いで多い。万寿寺の領域では出土例がなく、称名寺で使用された所用瓦か。全体的に作りが雑で、意図的かどうかかわからないが、瓦当文様の中心飾りが指で押しつぶされたような例もある(413)。製作年代は15世紀代か。
- 蓮華唐草文軒平瓦(422・423)；瓦当文様は蓮華文を中心飾りにもつ均整唐草文であるが、上段の蓮華唐草文軒平瓦と比較すると「蕾」の表現を欠く。出土数は少ない。中世大友府内町跡第28次調査SK028²⁴⁾で16世紀末葉の遺物と共存しているが、軒平瓦の製作年代は15世紀以前に遡ると思われる。
- 菱形唐草文軒平瓦(424～441)；瓦当文様は菱形文を中心飾りにもつ均整唐草文。内区文様の周囲に界線を有するが、瓦范の切り詰めによって、上下の界線のみが残存し、左右は欠失している。瓦当厚が比較的薄いことも特徴。出土数は最も多く、称名寺の創建瓦である可能性が考えられる。万寿寺でも使用されているようだ。製作年代は14世紀前半か。
- 変形菱形唐草文軒平瓦(442～446)；菱形文を中心飾りにもつ均整唐草文軒平瓦であるが、前掲の菱形唐草文軒平瓦と比較すると中心飾りが大きく退化している。唐草文は菱形唐草文軒平瓦よりは退化した印象を与えるが、その展開の仕方は同じであり、菱形唐草文軒平瓦→変形菱形唐草文軒平瓦の型式変化を考えたいところである。しかしながら、瓦当厚が厚く、菱形唐草文軒平瓦の瓦当断面とは大きく異なる形態であることや内区文様周囲の界線が上下左右ともに認められ、一周しているなど相違点も多く、両者が直接の系譜関係にある資料かどうか判断がつかない。一定量の出土が認められ、大友氏館跡や万寿寺、中世大友府内町跡の他の調査地点でも出土例がある。また、白杵石仏地域遺跡群IV類²⁵⁾と同范で、未公表のものであるが大分市天面山城跡からの出土資料にも同范例がある。山崎信二²⁶⁾は白杵石仏地域遺跡群IV類の年代を中世V期(1333～1380年)の中頃としている。製作年代は14世紀代である。
- 宝珠唐草文軒平瓦(447)；瓦当文様は宝珠文を中心飾りにもつ均整唐草文。瓦当部が完形で出土したが、出土数はこの1点に留まる。他の調査地点からも出土例がなく、数量的には極めて少ない。宝珠文は14世紀後半以降に出現するとされており²⁷⁾、製作年代を考える上で参考になる。また、当該資料の瓦当文様は山口県築山館跡出土の宝珠唐草文軒平瓦²⁸⁾(15世紀前半～後半)の資料に類似している印象を受ける。製作年代は15世紀代か。
- 宝珠唐草文軒平瓦(448・449)；瓦当文様は宝珠文を中心飾りにもつ均整唐草文。宝珠文は径の異なる3つの円を重ねて表現される。出土数は少ないが、万寿寺の領域である中世大友府内町跡第6次調査SX018²⁹⁾で出土例がある。万寿寺・称名寺の両方で使用されていた軒平瓦である。製作年代は15世紀代か。

註 24) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内4』第2分冊(2006年)202頁、第234図6

25) 白杵市教育委員会『白杵石仏地域遺跡調査報告書』(1982年)83～86頁

26) 山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所(2000年)347頁

27) 花田文獻に同じ。

28) 北島大輔『鎌倉城郭成立以前の室敷瓦—山口市波雲寺控瓦瓦の研究—』『西国城郭論集 河瀬正利先生追悼論集』(2009年)

29) 大分県教育委員会『中世大友府内町跡第6次調査』『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.12 2000年度(2001年)

変形花卉唐草文軒平瓦 (450) : 小破片であるが、瓦当文様は変形花卉文を中心飾りにもつ均整唐草文である。出土数量は少ない。中世大友府内町跡第18次調査東区⁷⁶で出土例がある。18次調査は称名寺に近接する町屋であり、出土瓦は本来称名寺に使用されていたものが、二次的に移動したものと考えられる。称名寺所用瓦であろう。年代は不明(14~15世紀代か?)。

唐草文軒平瓦 (451) : 破片の状態であるため、中心飾りの形態は不明で、また唐草文が均整唐草文であるのか扇向唐草文であるのかも不明である。中世大友府内町跡第18次調査西区で第2南北街路にバックされた状態で検出された14~15世紀代と思われる遺構⁷⁷からも出土例があり、そこでは変形菱形唐草文軒平瓦とともに出土している。製作年代は14~15世紀代か。

宝珠唐草文軒平瓦 (452・453) : 瓦当文様は宝珠文を中心飾りにもつ均整唐草文である。宝珠文は著しく退化しており、4反転する唐草文も連続した1本の唐草から反転部が派生している。一定量の出土を認め、豊後府内では比較的新しい段階に位置づけられる軒平瓦と推定されるが、万寿寺の領域をはじめ、他の調査地点でも出土例が多く認められる。中心飾りが退化した宝珠文は16世紀でも新しい段階から出現すると思われ、当該資料の製作年代を16世紀後葉以降に推定しておきたい。453については平瓦部が斜め方向に切られており、「隅軒平瓦」として使用されていることがわかる。また、他の調査地点の出土事例を勘案すると、宝珠文軒平瓦は第175図363で図示した巴文軒丸瓦とセットになる可能性が高いと思われる。

なお、454・455は瓦当文様の大部分を欠損する資料であるが、平瓦部と瓦当部との接合状況がわかる資料である。

丸瓦 456~470は丸瓦である。このうち、456~464は残存度が高く、後述するK10区付近の石塔類がまとまって出土した地点付近から出土した資料である。これらの丸瓦は長さ(玉縁部を含めない)24~25cm、幅13~13.5cm前後を測る。凸面には本来縄目叩きを行っていた可能性があるが、それが分からない程度に縦方向のミガキ調整がなされている。凹面には、糸切り痕(コビキA)や大きく垂れ下がる吊り紐痕とともに側縁側の凹面の一部に内叩きがなされていることが特徴である。大きさや調整の共通性、規格性の高さから、これらが同一工人によって製作されたと推測させるほどの資料である。吊り紐痕の形状や内叩きの状況から、製作年代は16世紀後葉に比定される資料と考えられている。465も丸瓦の破片で、凹面の特徴として内叩きが認められることなどが、456~464と共通する。また、凹面の玉縁部との境には凹みのある横線を設けている。466も丸瓦凹面に設けられた横線の一部である。467も丸瓦であるが、全体的に二次的な火を受けて、大きく焼け膨れている。同じような資料が、後述する井戸SE002からも出土(第223図755)しており、天正14年(1586)扇津侵攻時に被災した遺物である可能性をうかがわせる。468~470も丸瓦で、凹面に九州タイプの吊り紐痕が残るもの(468)や凸面に縄目叩きの痕跡が残るもの(469・470)がある。

平瓦 471は平瓦の完形品である。

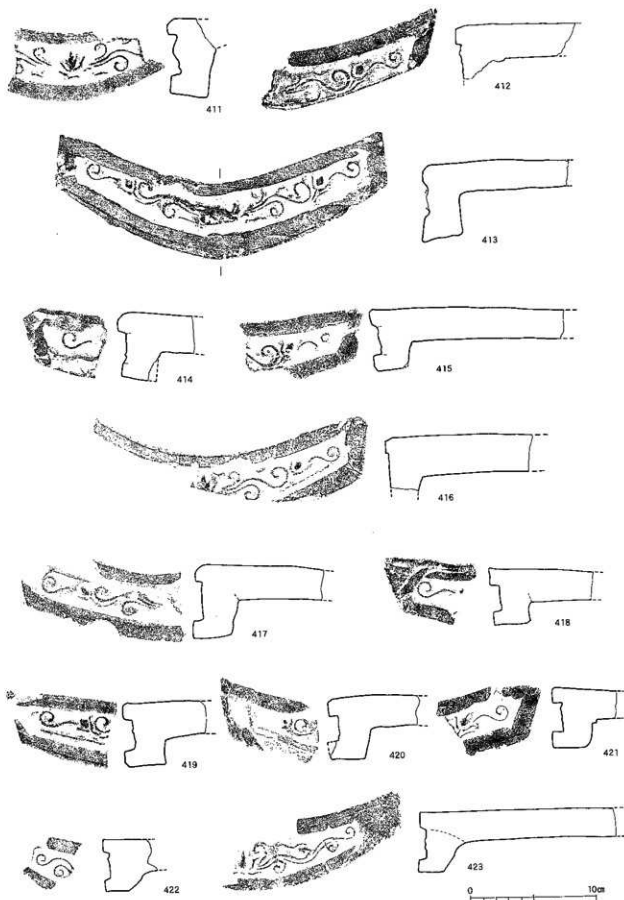
472~478・481は鬼瓦である。476には眼と額上の宝珠文、角などの表現が認められる。477は大型の瓦製品で、鬼瓦の一部である可能性も考えられるが、破片のため不明である。

鯉瓦? 479・480は鯉瓦か。479は鱗と背鰭の表現がある体部、480は胸鰭の部位であろうか。これらが鯉瓦であるとすれば、特に479は下層の出土であることから、その製作年代が1570~1580年代以前に遡ることになる。鯉瓦は織豊系城郭で使用されるが、第72次調査の調査区は城郭遺跡ではないので、鯉瓦が使用される意義を検討しなければならないであろう。

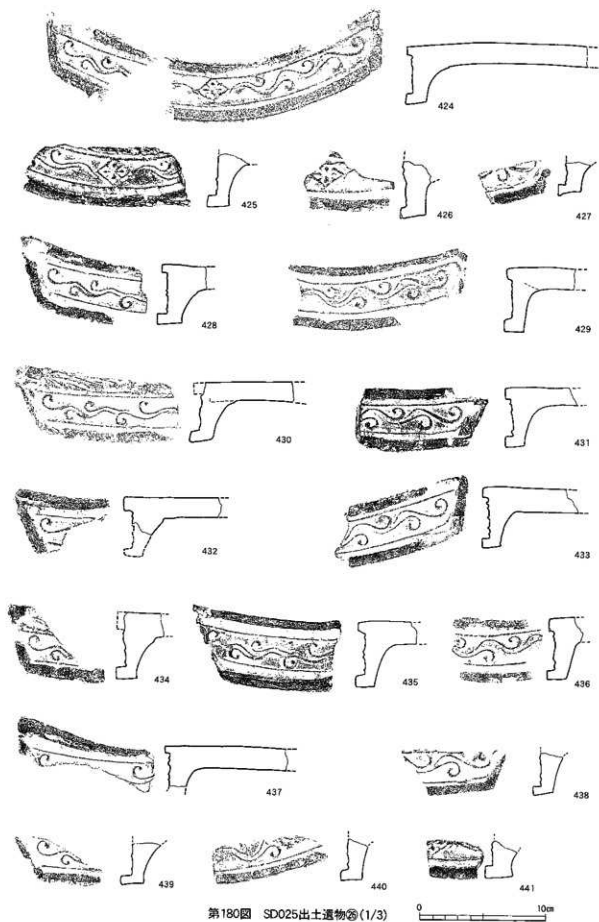
その他、482は面戸瓦、483は塼である。

注 (6) 大分県教育庁歴史文化財センター『豊後府内4』第2分冊(2006年)161頁、第181図291

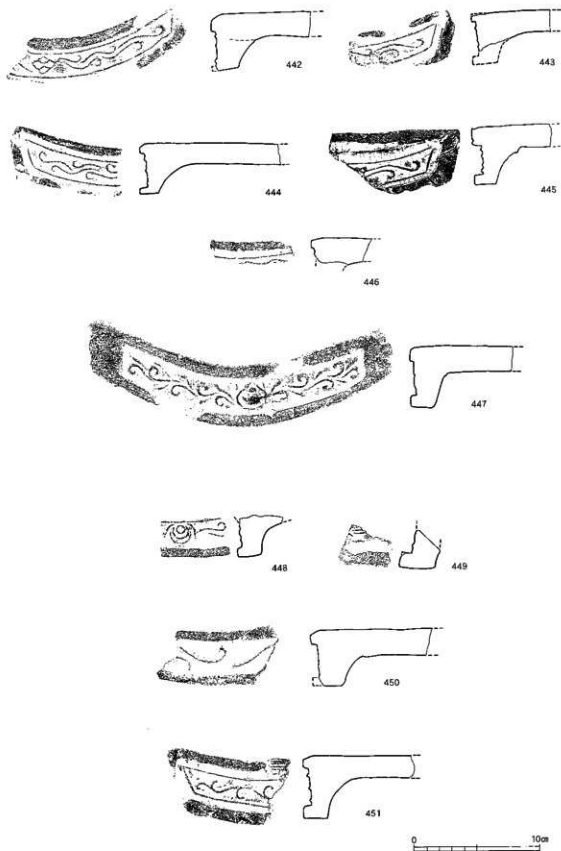
(7) 同上、14頁、第7図1



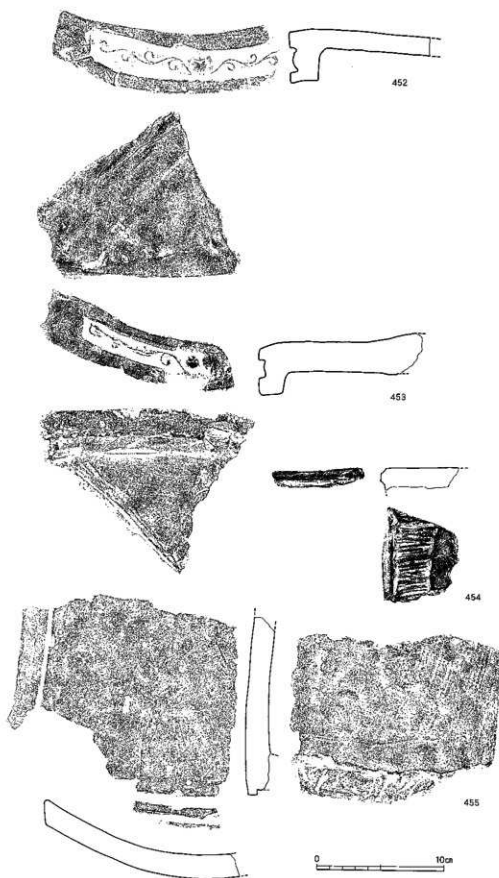
第179図 SD025出土遺物②(1/3)



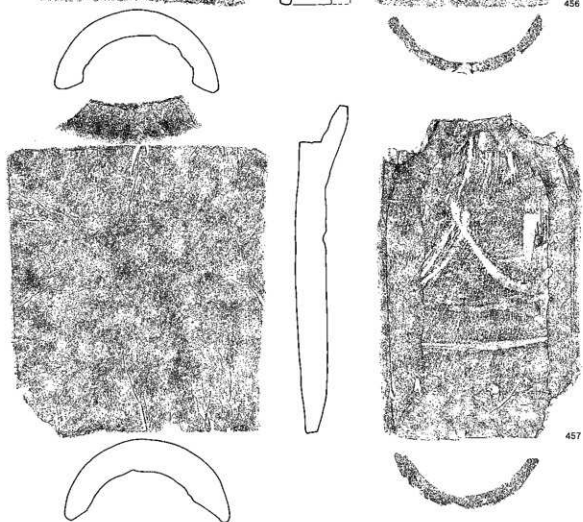
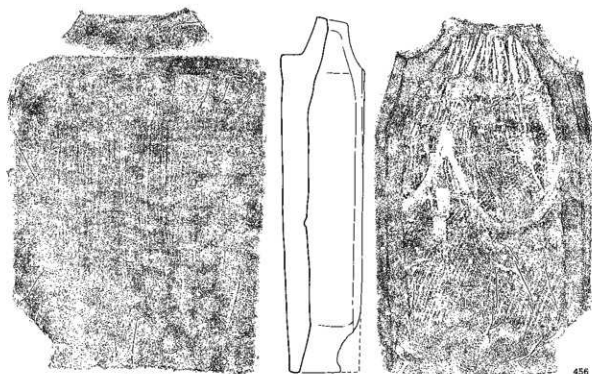
第180図 SD025出土遺物④(1/3)



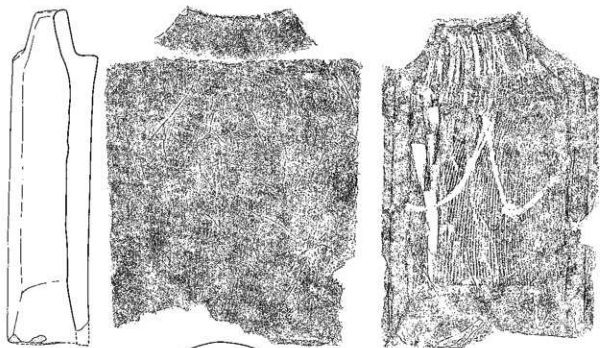
第181図 SD025出土遺物⑦(1/3)



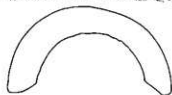
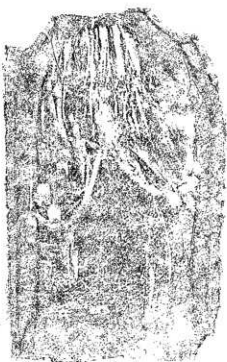
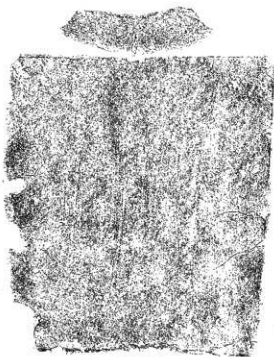
第182図 SD025出土遺物②(1/3)



第183図 SD025出土遺物②(1/3)

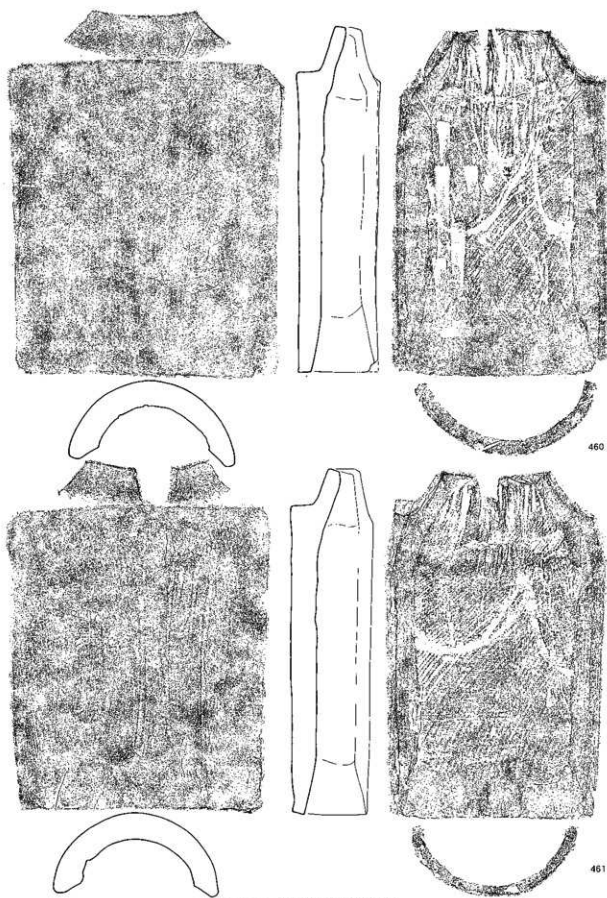


458

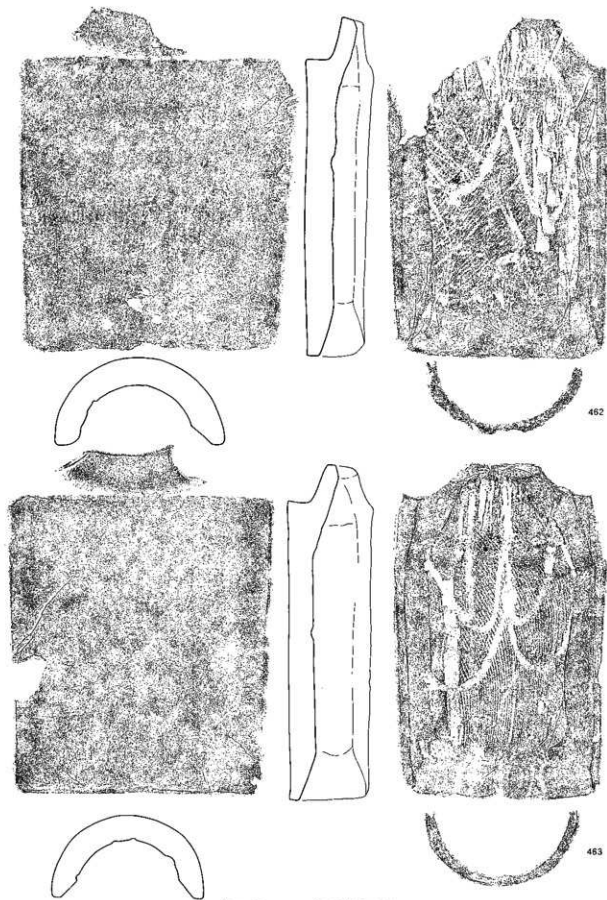


459

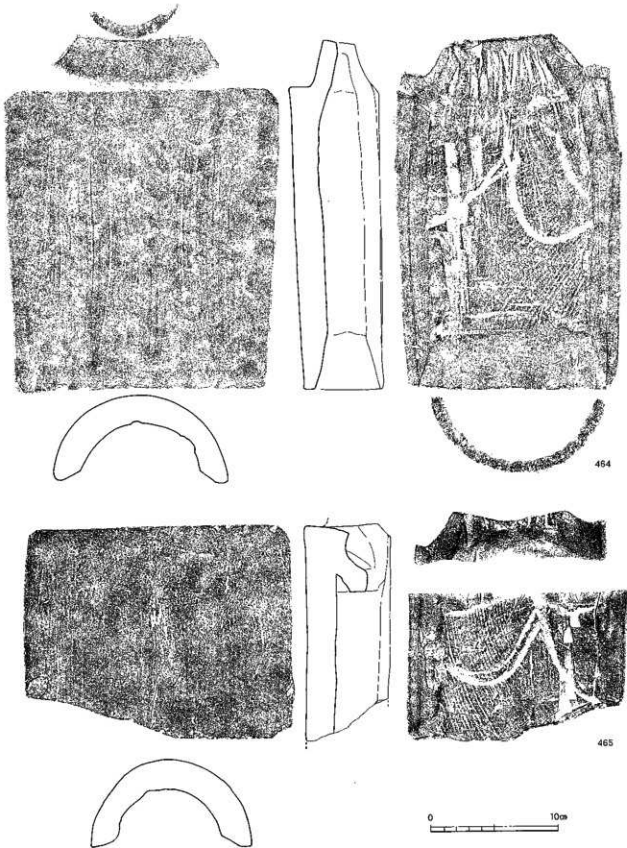
第184図 SD025出土遺物㊟(1/3)



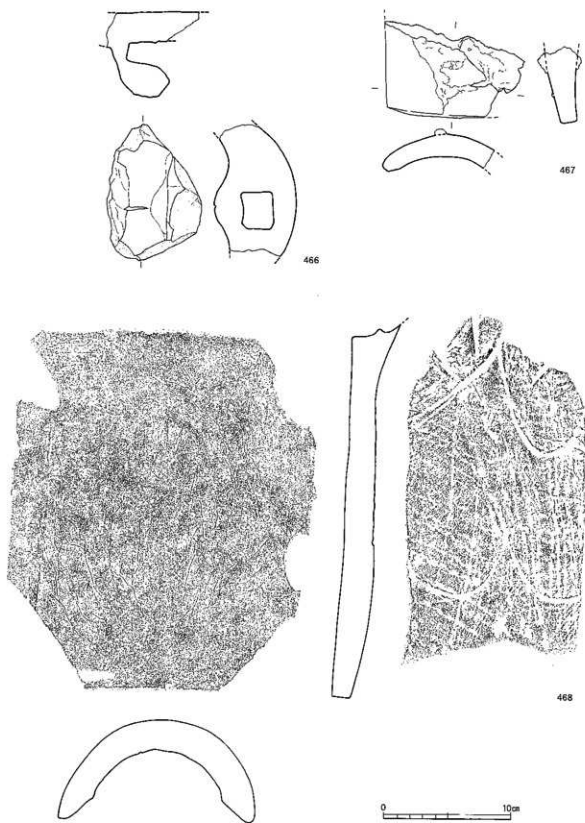
第185図 SD025出土遺物⑩(1/3)



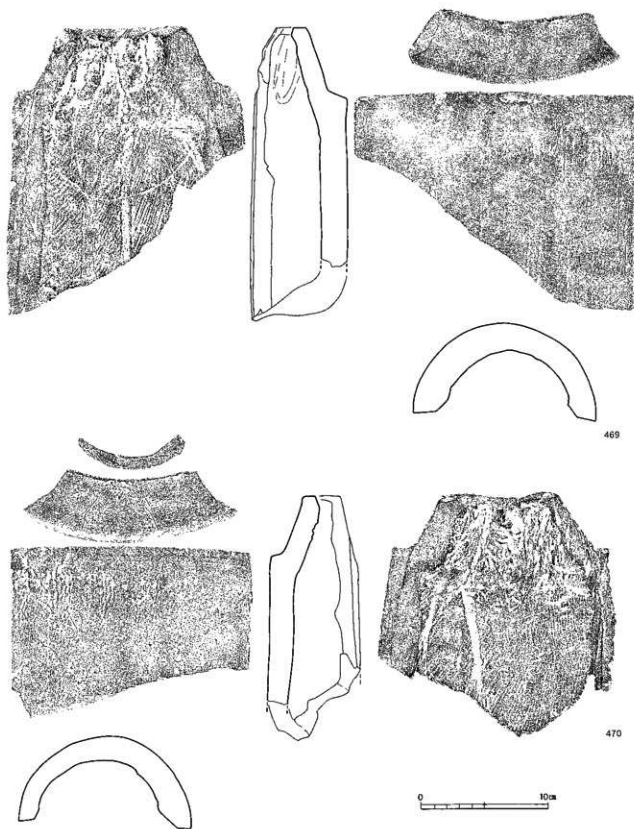
第186図 SD025出土遺物②(1/3)



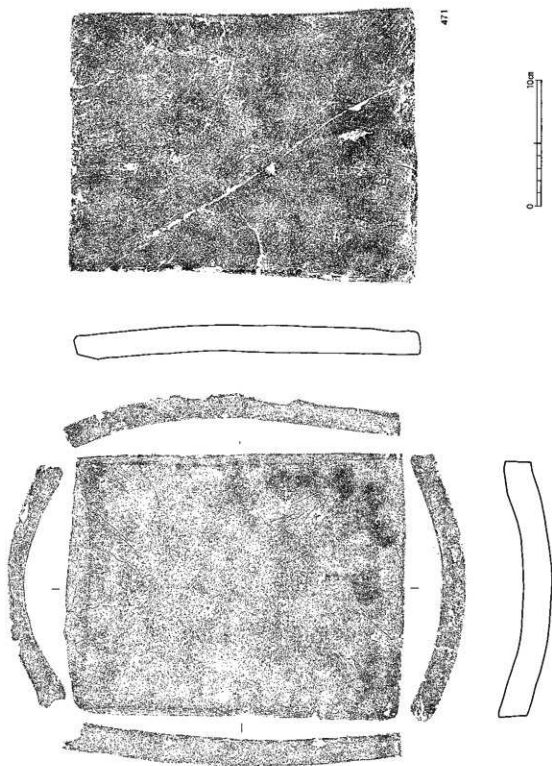
第187図 SD025出土遺物③(1/3)



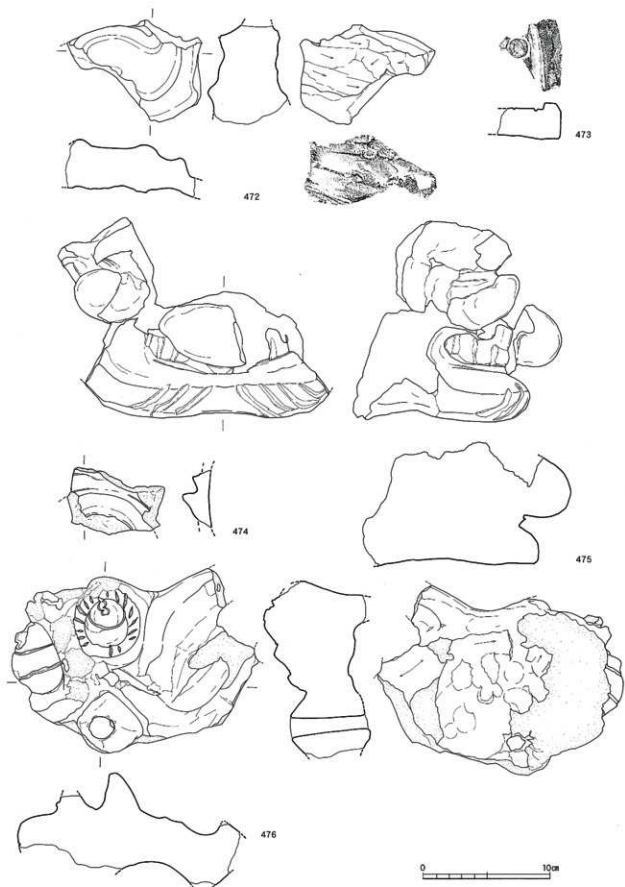
第188図 SD025出土遺物⑧(1/3)



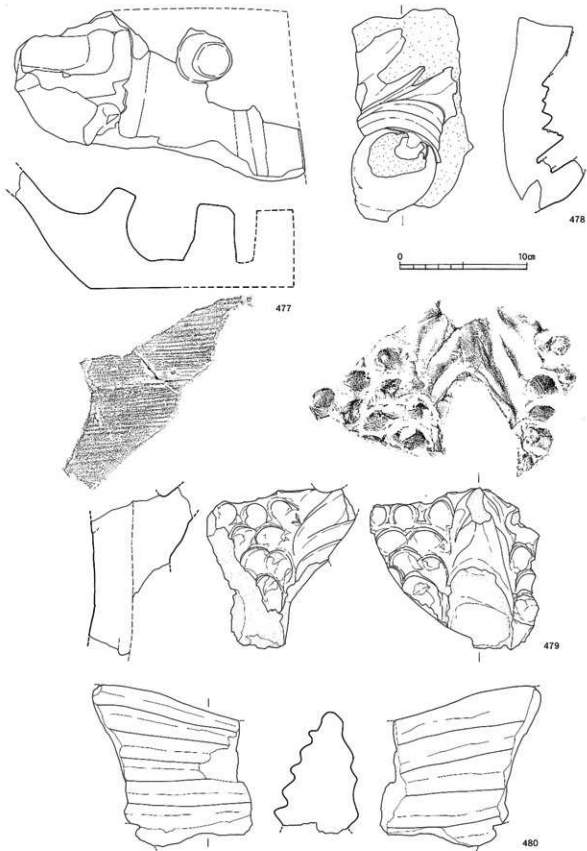
第189図 SD025出土遺物㊦(1/3)



第190図 SD025出土遺物⑤(1/3)



第191圖 SD025出土遺物①(1/3)



第192図 SD025出土遺物㊸(1/3)

金属製品 第194図で図示したものは、金属製品である。484は口金具、485は目貫金具で、いずれも青銅製である。486は豊後府内に特徴的な太鼓形分銅で、表面に三木文、裏面にはタガネ彫りによる刻線がある。重量は34.8g。487は鉛玉(鉄砲玉)で、一部が変形している。

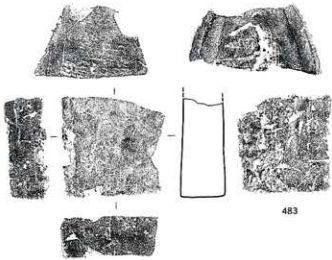
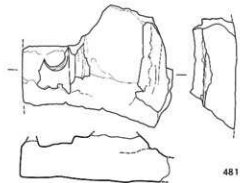
銅銭 第195図488～504は、銅銭である。上～中層・下層・層位不明に分けて提示した。また、494については、4枚の銅銭が鑄着している。銭貨名や初鋳年代などは、遺物一覧表を参照されたい。

石製品 第196・197図で図示したものは、石製品である。505・506は硯で、輝緑凝灰岩を素材とする赤間硯である。507は結晶片岩を長楕円形に加工した製品。用途不明で、上部先端に打ち欠きが認められるが、意図的なものかどうか不明である。

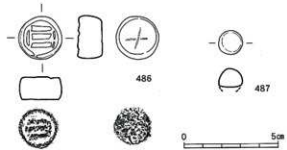
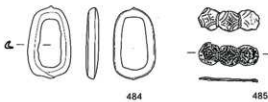
滑石製石鍋の二次加工品・・・？
磁石か？ 508～511は砥石である。512は滑石製品で、石鍋の二次加工品と思われる。温石として使用されたものであろうか。513も用途不明の軽石製品で、周囲に加工を加え、略円形の形状を呈している。

石臼 514～522は石臼で、安山岩を素材とする。523～526は和泉砂岩を素材とした茶臼で、関西方面からの搬入品である。527は石塔類の台座の一部で、蓮弁の表現がなされている。

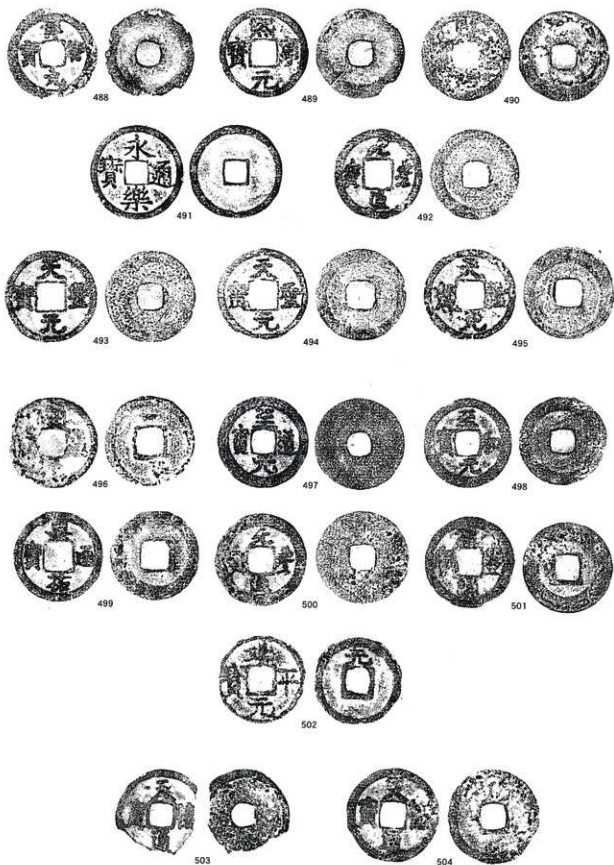
茶臼



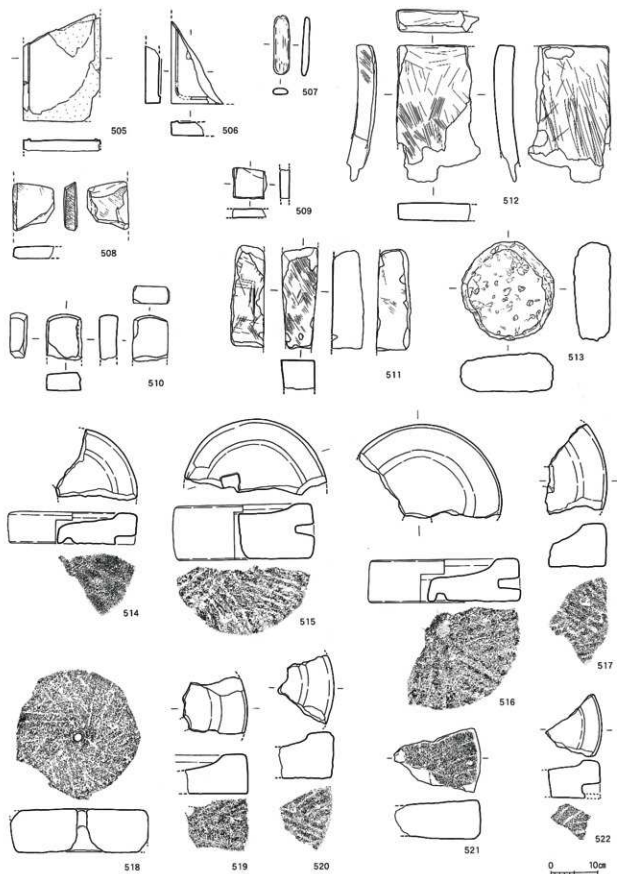
第193図 SD025出土遺物⑧(1/3)



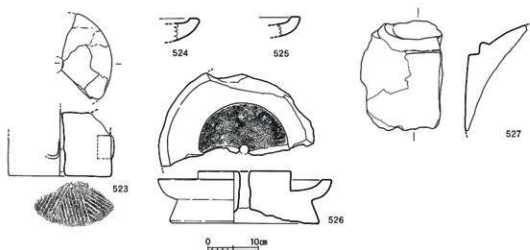
第194図 SD025出土遺物⑨(1/3)



第195図 SD025出土遺物④(1/3)



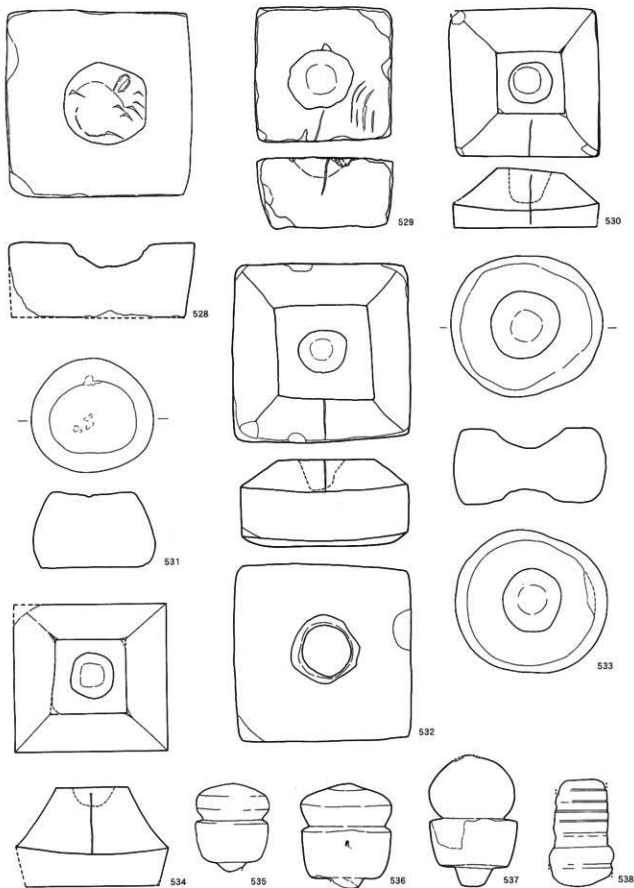
第196図 SD025出土遺物①(1/3)



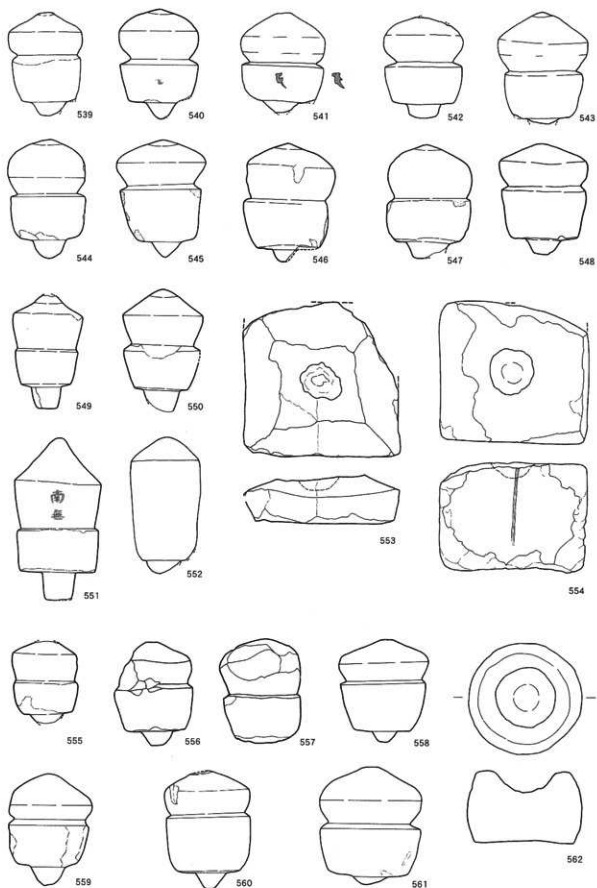
第197図 SD025出土遺物㉔(1/3)



第198図 SD025石塔類出土状況(1/50)

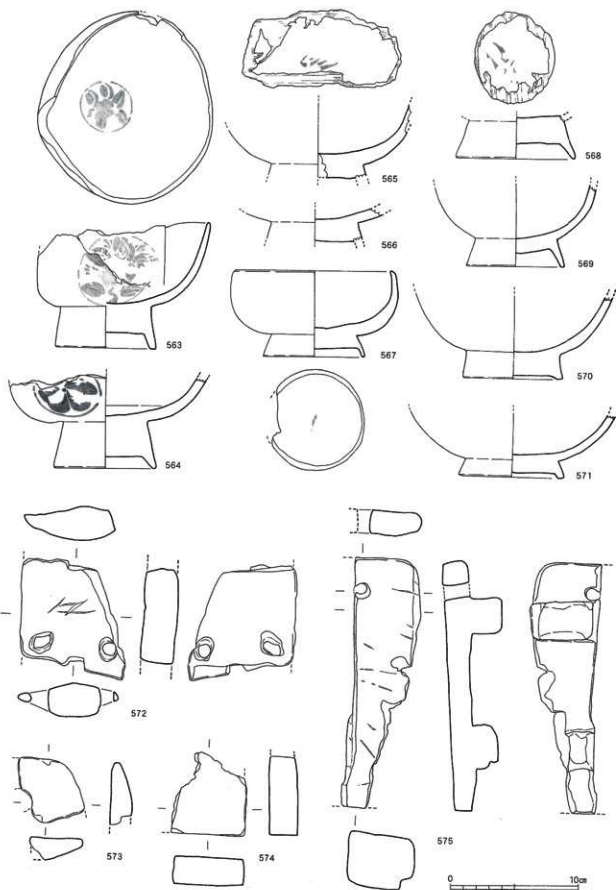


第199図 SD025出土遺物④(1/3)

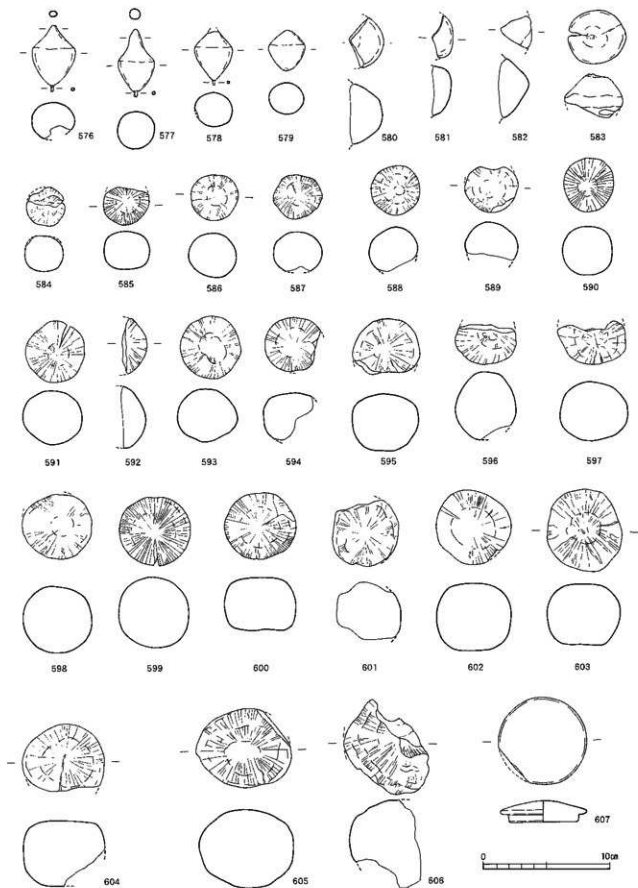


第200図 SD025出土遺物①(1/3)

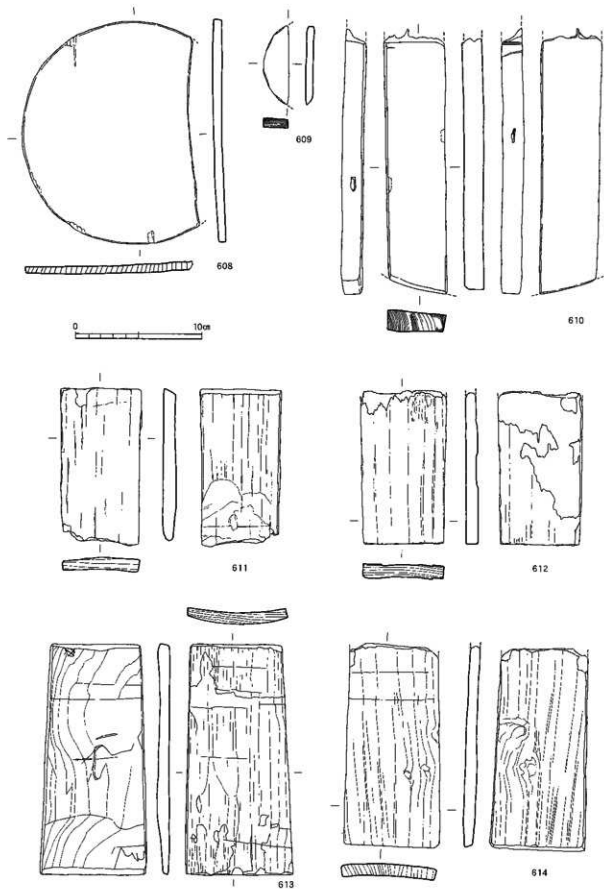
- 石塔類 第199・200図で提示したものは石塔類で、使用されている石材はすべて凝灰岩である。石塔類には、五輪塔の空風輪・火輪・水輪・地輪、宝塔の相輪などがあり、出土層位から上へ中層、下層に分けて図示している。
- K10区付近でまとまって出土した石塔類 このうち、第199図で図示したものは、K10区付近の上層からまとまって出土したものである。出土状態については、第198図で提示しているように、堀の内側（屋敷側）から廃棄されていることが分かる。すでに記したように、石塔類については部位がバラバラの状態であり、地輪も少数存在するものの、火輪・水輪・空風輪が多い。これには建築部材として使用しやすい地輪を確保し、再利用しにくい火輪・水輪・空風輪などを選択して廃棄した可能性が考えられる。
- 木製品類 五輪塔の空風輪には梵字（536・540・541）や「南無」（551）の墨書が認められる資料も存在し、火輪や地輪には正面観を示すための割付線が存在する資料（529・530・532・534・554）もある。
- 「橋文」の漆器類 第201～211図で提示したものは、木製品類である。これらはすべて下層からの出土遺物である。563～571は漆器碗。これらは器表面に黒漆を施し、文様がある場合はすべてが赤漆によって描かれている。このうち、535は体部外面と見込みに「橋文」が描かれる。橋文が描かれている漆器碗は、大友氏館跡・中世大友府内町跡で出土事例が増加しており、在地で製作された漆器碗であることが想定できる。
- 572～575は下駄である。
- 576～583は独坐。完形品で観察すると、体部の中央に鉄製の芯を打っている。
- 584～606は毬(ぎつ)杖(ちよう)の球。球には径の小さいものから大きいものまで数種類があるが、これが規格的なものかどうかは分からない。
- 607は木製合子の蓋である。
- 608～610は曲物の底板。610には側面に木釘の穴があり、複数の木材を組み合わせて製作されていることがわかる。
- 611～615は手桶の側板。完形品である613は器高18.5cm程度の手桶の側板で、外面にタガを巻いた痕跡が観察できる。
- 付札 616は付札で、長方形の薄い板の角を一箇所のみ切り落とすとともに、板の長辺に対となる2箇所の切り込みを設けている。目視では表面に墨書などは認められないようである。
- 617～619は丸太の先端に加工を施して尖らせており、杭として使用された製品と推定される。
- 620は丸太の両端を切り落として平坦部を形成しているが、用途は不明である。
- 621は貫通孔を有する小型の加工木材で、これも用途不明である。垂飾品か？
- 622は箸、623・624は柄杓の柄である。
- 625は用途不明で、丸太状の加工木材である。
- 626は加工木材で、長方形の木材の短辺に加工を施し、側面の一辺と短辺側の側縁近くに木釘の痕跡が認められる。その形態や木釘の状況から、木製拵(ます)の部材である可能性が考えられる。
- 木製拵か？ 627～636は曲物の側板である。体部に木釘の孔や皮紐で綴じるための長方形のくり込みが認められる資料もある。
- 637～697は用途不明の加工木材である。このうち、652～655は下駄の歯である可能性も考えられる資料である。
- 草鞋 698・699は草鞋である。SD025からは草鞋が複数個体出土したが、取り上げ時に破損するものが多く、実測図を提示できたのは、2点に留まる。



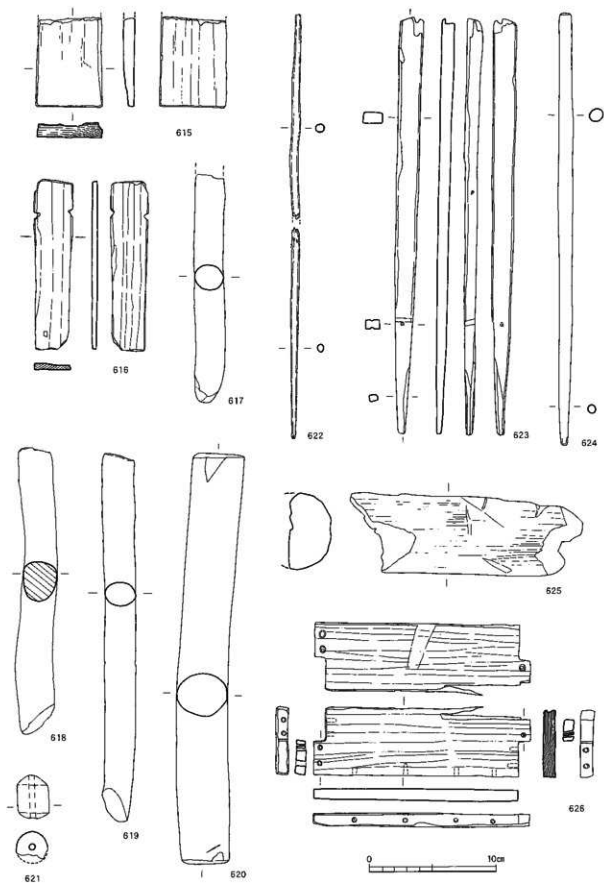
第201圖 SD025出土遺物⑥(1/3)



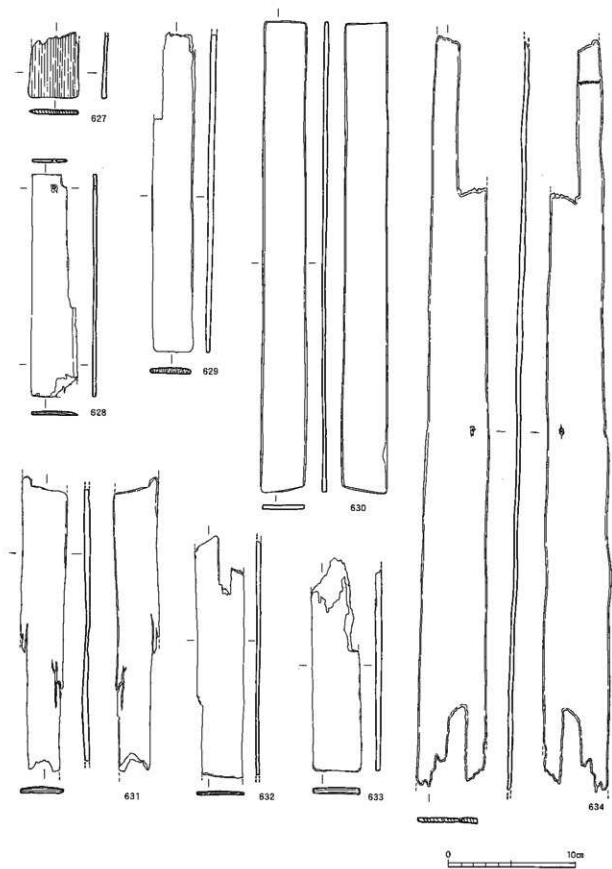
第202図 SD025出土遺物①(1/3)



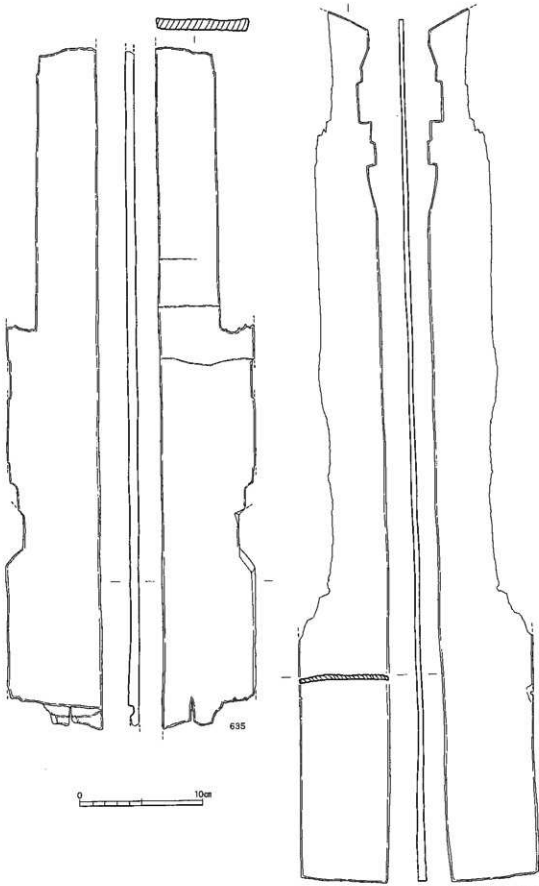
第203図 SD025出土遺物④(1/3)



第204図 SD025出土遺物①(1/3)

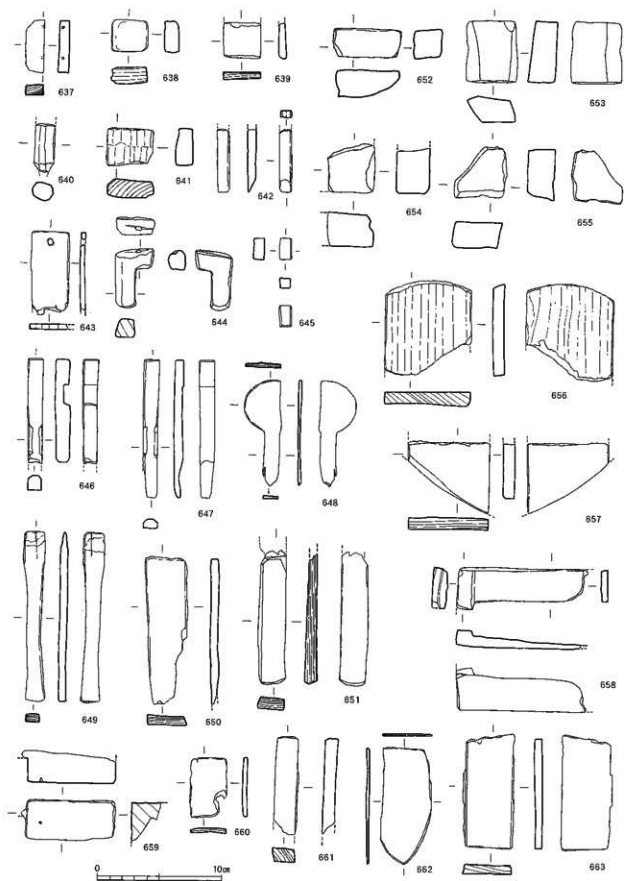


第205図 SD025出土遺物㊸(1/3)

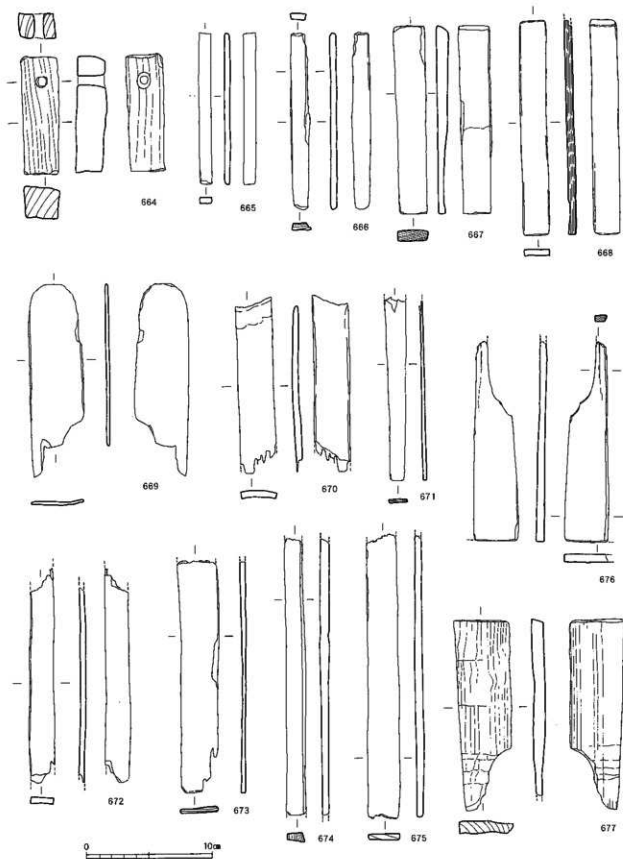


第206図 SD025出土遺物⑤(1/3)

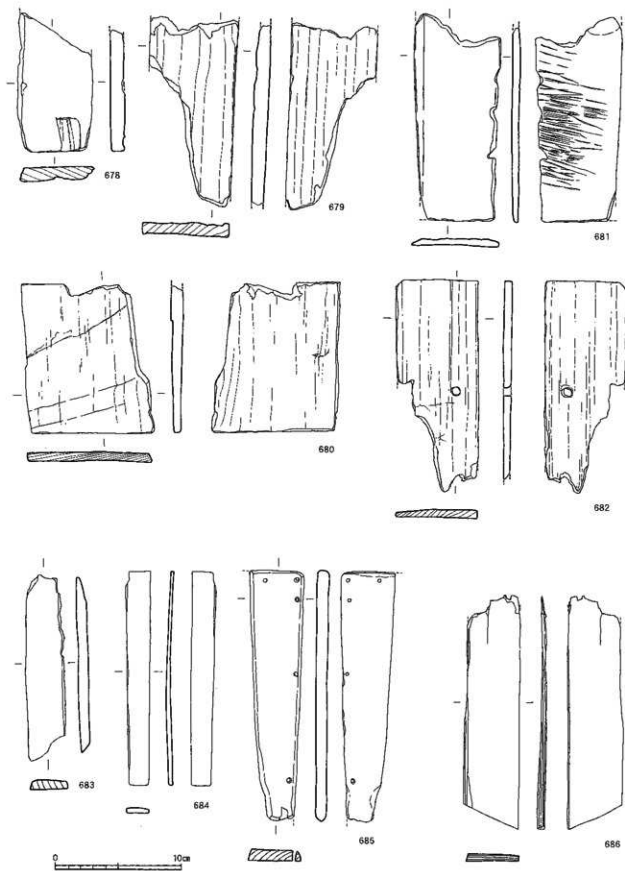
636



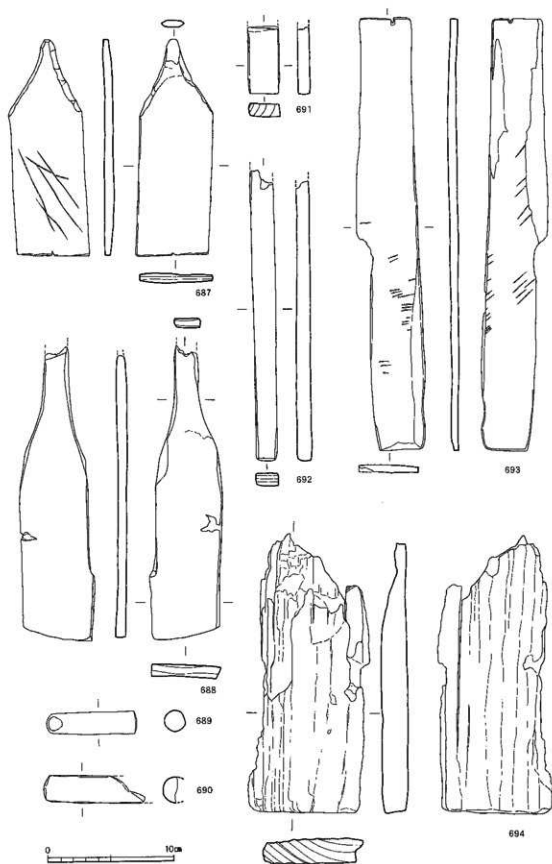
第207図 SD025出土遺物①(1/3)



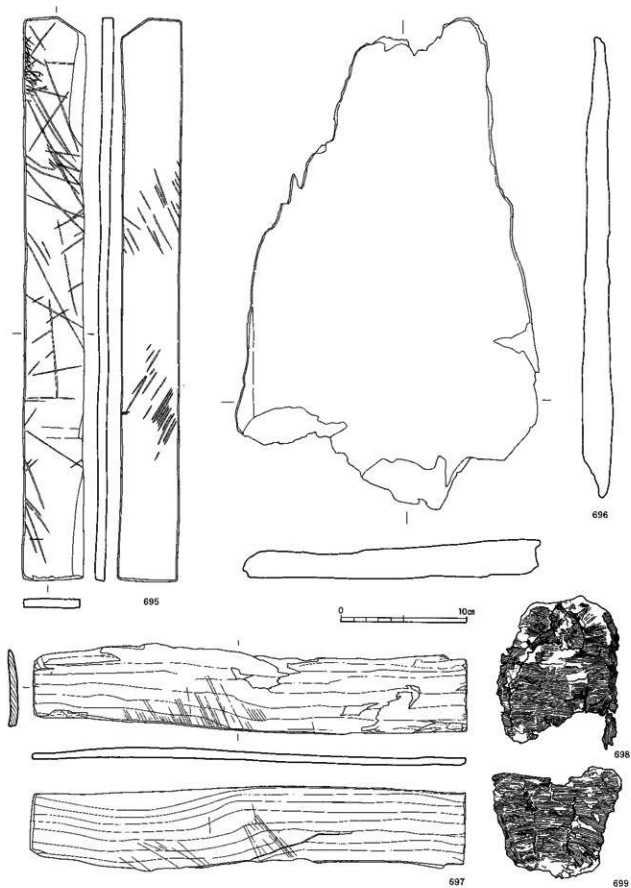
第208図 SD025出土遺物③(1/3)



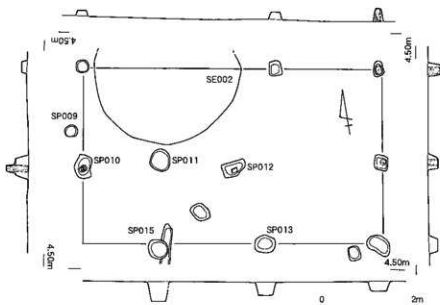
第209図 SD025出土遺物④(1/3)



第210図 SD025出土遺物⑤(1/3)



第211図 SD025出土遺物㊦(1/3)



第212図 SB045実測図(1/80)

第213図 柱穴出土遺物(1/3)
700 SP010+SK017 701 SP019 702 SP032

(3) 掘立柱建物・柱穴

SB045 (第212図)

井戸SE002
と切り合い
関係

L10区で検出した南北2間、東西3間の掘立柱建物である。後述する井戸SE002と切り合い関係を有し、構築順序はSB045→SE002である。建物の東西軸は名ヶ小路SF030や石列SX014、後述する土坑SK006やSK017と一致する。報告書作成時に新たに遺構番号を付した遺構であり、柱穴SP010・SP013・SP015などが建物を構成する柱穴になる。柱穴平面や断面の精査により、柱痕跡を検出できた柱穴もある。切り合い関係にある井戸SE002の時期は16世紀末葉から17世紀初頭であるが、あまり時期差は認められず、掘立柱建物SB045の構築時期も16世紀末葉から17世紀初頭に比定される。遺構の空間配置や遺物の接合関係から、土坑SK006・SK017、石列SX014と同時併存した可能性が考えられる建物遺構である。

土坑SK006
・SK017・
石列SX014
と同時併存
?

柱穴出土遺物 (第213図)

SB045と
SK017の
同時併存を
傍証

第72次調査区で検出された柱穴からの出土遺物を一括して報告する。

700は瀬戸美濃系陶器Ⅲで、掘立柱建物SB045を構成する柱穴SP010と土坑SK017との遺構間接合資料である。SB045とSK017の同時併存を傍証する資料でもある。701はSP019の出土遺物で、小型の中国陶磁の青磁碗である。外面に銘文の一部が認められる。702はSP032の出土遺物で、土師質土器を円形に再加工した製品である。

(4) 土坑・瓦瀧め

土坑・瓦瀧めについては、16世紀末葉から17世紀初頭以降の比定される「町屋」段階に属する遺構群と16世紀末葉以前に比定できる名々小路SF030の構築土層中から掘り込まれた遺構群に大別できる。以下、報告する。

SK006 (第214図)

L10区に位置する土坑で、平面形態は略隅丸方形を呈する。長軸1.2m、短軸0.8m、深さ28cmで、内部から多量の瓦片が出土したほか、土器片・陶磁器片も認められた。遺構の東西軸が前述した掘立柱建物SB045のそれと一致することから、両者は同時併存した可能性がある。16世紀末葉から17世紀初頭以降に比定される「町屋」段階に属する土坑である。

出土遺物は第215図703~712に示した。703は中国陶磁の青磁皿で、外面に繪文を有する。704は景德鎮系青花皿で、小野分類E群の製品。705~708は京都系土師器で、705は深手の坏、その他は皿である。709は備前焼鉢鉢で、近世1期の製品。710は瓦質土器鉢で、口縁外面の2条突帯間に雷文の刻印(スタンブ文)をもつ。711は巴文軒丸瓦の破片で、瓦当面の珠文が小さいことが特徴である。712は石塔類(宝塔)の小破片で、SD025にも同じような破片が出土している(第197図527)。

SK017 (第214図)

L10区に位置する土坑で、平面形態は方形である。井戸SE002と切り合い関係を有し、構築順序はSB045→SK017である。長軸1.2m、短軸0.65m、深さ80cmで、埋上中位から下位にかけて、土器や陶磁器類、石塔類の空風輪などが出土したほか、炭化物が集中している部位が認められた。東西軸が掘立柱建物SB045のそれと同じであることや両者とも井戸SE002に切られていることから、SB045とSK017は同時期であり、しかも両者がセットで存在した遺構である可能性が考えられる。遺構の深さが一定深度を有するものであるため、便所遺構である可能性も考慮されるが、埋土の土壌分析を行っておらず不明である。出土遺物の中に軟質施軸陶器や大窩IV期の折縁ソギ皿などがあることから、1590年代の遺構、すなわち「町屋」段階に属する土坑である。

便所遺構の可能性？

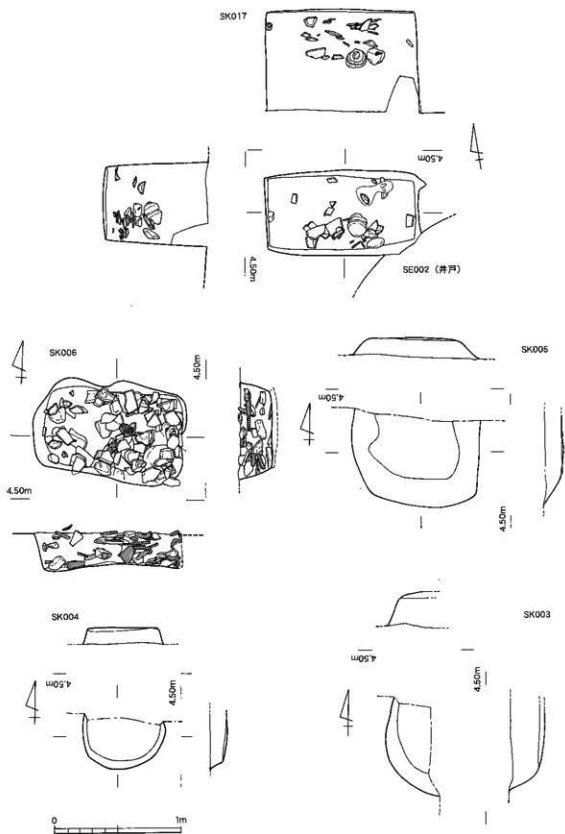
出土遺物は第215図713~720に示した。713は景德鎮系青花で、饅頭心となる小野分類E群青花碗である。714は中国産の白磁皿で、口縁部が輪花となり、見込みと底部付近が露胎となる。中国南部系の製品であろう。外底部に「十」の墨書が描かれている。715は関西系の軟質施軸陶器で、外面に白釉、内面に黒釉が施されている。716は瀬戸美濃系の折縁ソギ皿の口縁部破片で、大窩IV期(1590~1600年代)に編年される製品である。717は瀬戸美濃系の陶器皿の底部破片である。718は在地系の瓦質土器火鉢で、底部付近の胴部外面に背の低い突帯を巡らせ、突帯間に双頭蕨手文の刻印(スタンブ文)を有する。719は朝鮮王朝陶磁の白磁の皿で、見込みに「鏡」と呼ばれる紋をもっている。大型の白磁皿に復元される可能性があり、豊後府内での類例としては中世大友府内町跡第3次調査SX210(18)の出土品があるが、全く同類のものかどうかは分からない。見込みには「山」の釘掻きが見られ、高台部外面にも釘書き文様を施している。720は京都系土師器で、深手の坏である。722は石塔類の空風輪で、凝灰岩製である。

「十」の墨書

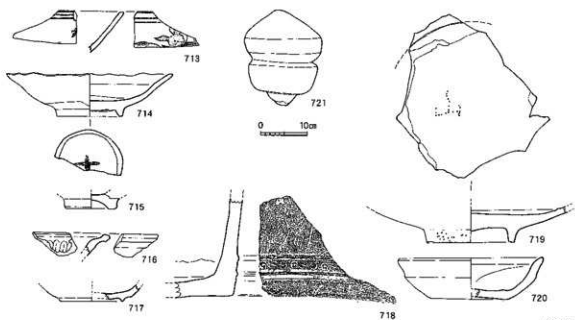
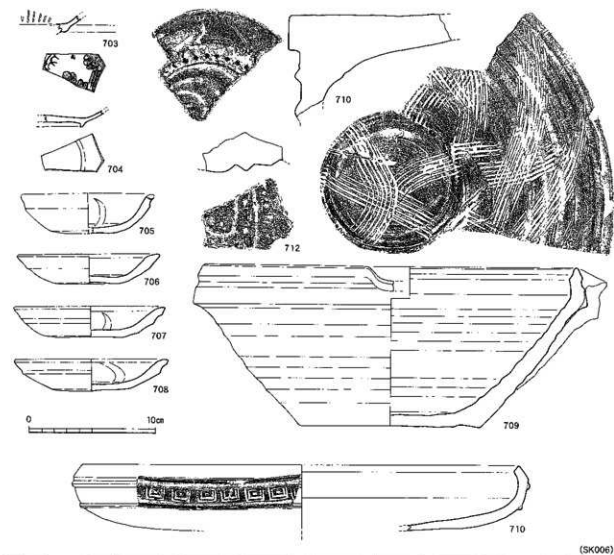
朝鮮王朝
白磁皿
(大型品?)
「山」の
釘掻き

SK003・SK004・SK005・SK018 (第214図)

いずれも土坑であるが、時期を示すような遺物は出土しなかった。遺構の位置や層位的な関係から、16世紀末葉から17世紀初頭以降に比定される「町屋」段階に属する廃棄土坑であろう。



第214図 土坑実測図①(1/30)



第215図 土坑出土遺物①(1/3)

SK033~SK037 (第216図)

いずれもK11区で検出された土坑で、名ヶ小路を形成する土層群の下位から掘り込まれていることを確認している。名ヶ小路が構築されてから一定時間が経過し、かつ道路が機能し続けている時期に構築されていることになる。街路空間の中でも人の往来の激しくない北縁部を利用して、廃棄土坑を構築したものと推定される。特にSK034~037の平面位置から、土坑の構築と埋め戻しが連続して繰り返されているような状況も認められた。また、一部の土坑は16世紀後葉から末葉の埴SD025Aから切られている。時期を示す遺物が出土した土坑は少数に留まるが、京都系土師器や中国南部の焼締陶器が出土しており、16世紀後葉から末葉に構築されたものであることを示している。各土坑の規模と出土遺物は、以下の通り。

SK033：長軸0.85m、短軸0.3m以上、深さ15cm、京都系土師器が出土。切り合い関係にある2基の土坑か？

SK034：長軸0.65m、短軸0.4m、深さ30cm、出土遺物なし。

SK035：長軸1.0m、短軸0.6m、深さ40cm、出土遺物なし。

SK036：長軸0.7m、短軸0.6m、深さ45cm、白磁小片・瓦片・中国南部産焼締陶器鉢が出土。

SK037：長軸0.4m、短軸0.5m、深さ30cm、出土遺物なし。

出土遺物は第217図に示した。722がSK033、723・724がSK036の出土遺物である。

722は京都系土師器皿で、塩地幅年2期に分類される製品である。723・724は中国南部の焼締陶器鉢で、同一個体であるが、接点が認められない。吉田分類B類に相当する。

SK038 (第216図)

K11区で検出された土坑で、SK033~037と同様、名ヶ小路の北縁部を利用して構築された廃棄土坑と推定される。長軸2.0m、短軸0.5m、深さ75cmで、二段掘りとなる。出土遺物は認められなかった。

SK039・SK040・SK041 (第216図)

いずれも、調査区南東隅のL11区で検出された土坑である。このうち、SK040とSK041は前述したSK033などと同様な性格の廃棄土坑である。SK039については、調査区東壁の土層断面(第144図)によると、名ヶ小路SF030を構成する整地層群から完全にバックされていることが確認できるため、街路構築以前の遺構であることが確実である。しかしながら、土坑内部から、構築時期を明確にできるような遺物は出土しなかった。各土坑の規模と出土遺物は、以下の通り。

SK039：長軸0.3m、短軸0.2m、深さ10cm、名ヶ小路が形成される以前に構築された土坑。土師質土器小片が出土したが、構築時期を明確にできる遺物なし。

SK040：径約0.7m、深さ20cm、京都系土師器・瓦質土器檜鉢が出土。

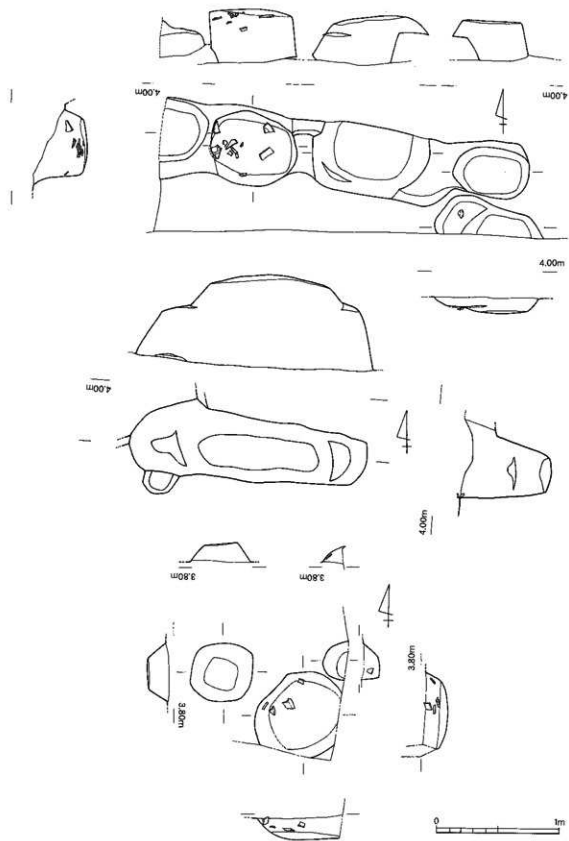
SK041：径約0.5m、深さ15cm、出土遺物なし。

以上の土坑のうち、図示可能な遺物が認められたSK040から出土した遺物を、第217図725~727で提示した。

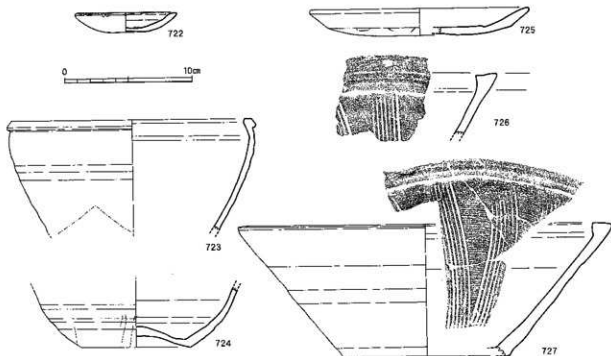
725は京都系土師器皿で、塩地幅年2期から3期に幅年される製品である。726・727は在地系の瓦質土器檜鉢である。同一個体と推定される。

道路北縁部に構築された廃棄土坑

SK039・・・
名ヶ小路構築以前の遺構



第216圖 土坑実測図②(1/30)



第217図 土坑出土遺物②(1/3)
722 SK033 723-724 SK036 725~727 SK040

SX042 (第218図)

14世紀代の
大型土坑?

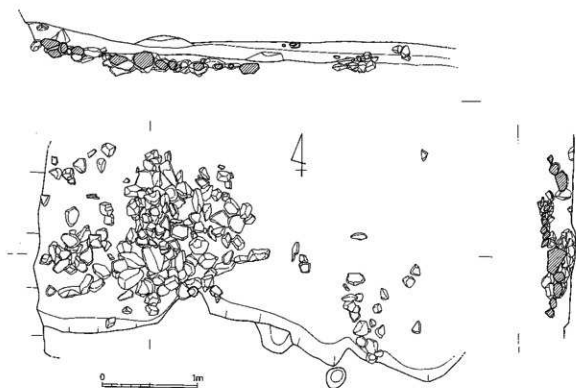
J10~K10区で検出された遺構である。堀SD025の底面に残存していたもので、東西約3.0m、南北約1.3mの範囲に礫が集中して検出された。当初この遺構の性格についての判断に苦慮したが、遺構の規模や広がりなどから、大型土坑の基底面でないかと判断するに至った。この想定が正しければ、地山面のレベルからみて、深さ1m程度的大型土坑であったことが推定され、15世紀後葉の堀SD025Bの構築により破壊されていることになる。出土遺物には土師質土器・瓦質土器・砥石・石臼などが認められ、土師質土器の年代観から14世紀の遺構と推定した。

第219図はSX042の出土遺物である。728・729は土師質土器坏で、胎土が赤褐色を呈する在地系の土師質土器である。底部には、磨滅しているが、回転糸切り痕が認められる。14世紀代の所産であろう。730は瓦質土器口縁部で、これも14世紀代の製品である。731は土鍾、732は砥石である。733は石臼の上臼で、安山岩を素材とする。

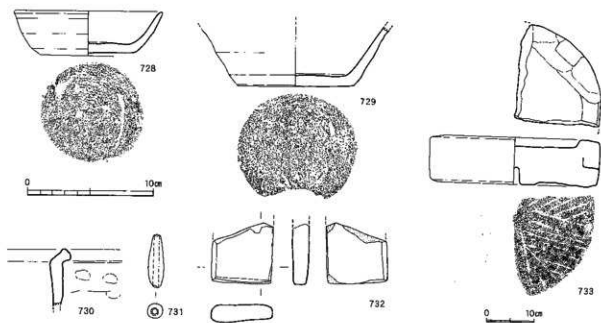
SX007

瓦溜め

J10~K10区で検出された遺構である。堀SD025Aの埋没後に生じた陥没部分を瓦の破片などで埋設した瓦溜めと推定される。遺構は東西約6.0m、南北約4.5mで、延長部は北側に延び、第80次調査でも連続部分が検出されている。層位的な所見から、「町屋段階」の16世紀末葉から17世紀初頭の遺構と推定する。

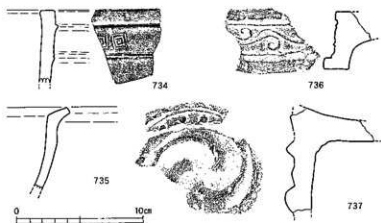


第218圖 SX042実測図(1/40)



第219圖 SX042出土遺物(1/3, 1/8)

第220図はSX007の出上遺物である。734は瓦質土器火鉢の口縁部で、外面に2条の突帯を巡らせ、突帯間に雷文の刻印を有する。735は瓦質土器鉢の口縁部である。736は菱形唐草文軒平瓦、737は軒丸瓦の破片である。



(5) 井戸

SE002 (第221図)

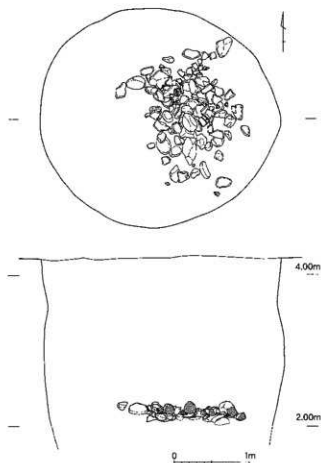
第220図 SX007出土遺物(1/3)

L10区で検出された井戸で、掘方の平面プランは径約2.9~3.1mの略円形を呈する。検出面から約2m掘り下げたところ、拳大から頭大の礫や瓦片が廃棄された状況が観察できた。これらの礫は井割の施設を抜き取った後に生じた穴に投棄されたものと推定される。これ以上の掘り下げを進めると遺構壁面の崩壊などの危険が生じるため、この段階で調査を留めている。出土遺物の中には唐津焼の陶器碗や大塚IV期の折縁ソギ皿があり、「町屋段階」の16世紀末葉から17世紀初頭の遺構であることが判明する。

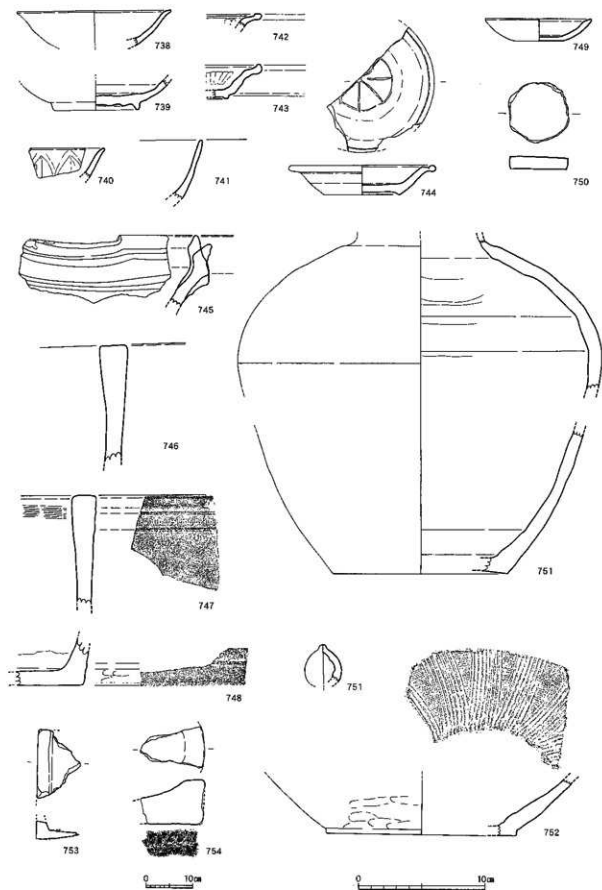
第222~223図はSE002の出上遺物である。738・739は中国陶磁の白磁皿、740は龍泉窯系鋪蓮文青磁碗である。741は内外面に土灰釉と呼ばれる灰オリーブ色の釉薬を施した唐津焼の碗の口縁部である。742・743は大塚IV期に比定される瀬戸美濃系の折縁ソギ皿である。なお、741~743は1590年代以降の製品であり、遺構の年代を決める上で示標となる遺物である。744は瀬戸美濃系の陶器皿で、露胎となる見込みの部位に沈線文様が施されている。745は備前焼擂鉢の口縁部で、16世紀代の製品。746は在地系の瓦質土器鉢の口縁部である。747・748は在地系土器の火鉢で、747には二連雷文、748には双頭蕨手文の刻印が施されている。749は京都系土師器皿で、埴地編年2~3期の製品。750は瓦質土器を円形に再加工した製品である。751は中国産の褐釉陶器壺で、同一個体と推定されるが、接合していない。井戸SE002と堀

土灰釉の唐津焼碗

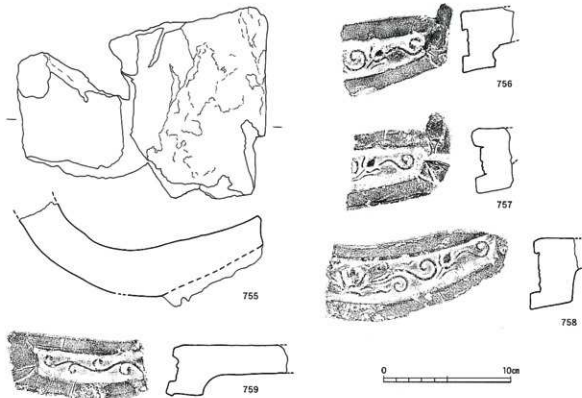
折縁ソギ皿



第221図 SE002実測図(1/50)



第222図 SE002出土遺物①(1/3)



第223図 SE002出土遺物②(1/3)

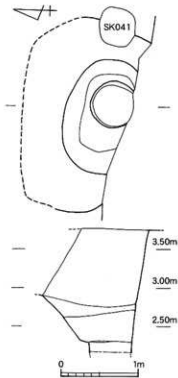
SD025上層出土の破片が接合する遺構間接合資料である。
751は土鈴の破片。752は瓦質土器摺鉢の底部である。753は
輝緑凝灰岩を素材とする赤間硯、754は安山岩を素材とする
石臼である。

755は焼け膨れた瓦で、これも井戸SE002と堀SD025上
層出土の破片の遺構間接合資料である。また、同じような資
料が堀SD025上層からも出土している(第188図467)。756～
759は軒平瓦で、756～758は蓮華唐草文軒平瓦、759は宝珠
唐草文軒平瓦である。このうち、756～758の蓮華唐草文軒平
瓦は瓦当側縁に袖部を有しており、これらが「隅軒平瓦」で
あったことがわかる。

隅軒平瓦

SE044 (第224図)

L11区で検出された井戸で、掘方の平面プランは径2.5m程
度の円形であったと思われるが、SD025の構築や攪乱により
破壊を受けている。また、16世紀後葉から末葉の土坑SK041
とも切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSE044→SK041
である。名ヶ小路を形成する整地層群に完全にバックされて
いることも確認できる。遺構は完備していないが、底面付近
に円形の掘り込みプランが検出され、当該部位に結桶もしく
は曲物が設置されていたものと推定される。調査で掘り下げ



第224図 SE044実測図(1/50)

を行った深さは1.65mである。出土遺物は僅少であるが、埋土中から瓦質土器土鍋の口縁部が出土しており、遺物の年代観から遺構の構築時期を14世紀代に想定している。なお、SE044の近接地点である第48次-1調査L11区でも、井戸（SE032）³⁶が検出されており、この地点付近には井戸が複数基近接して構築されている可能性がある。



第225図 SE044出土遺物(1/3)

第225図760は、瓦質土器土鍋の口縁部破片である。14世紀代の所産と思われる。

(6) 包含層・整地層の出土遺物

第226図に示したものは、遺構に伴わない出土遺物である。

761～775は「上層」として遺構検出中に取り上げた遺物、776～781は堀SD025の検出に先んじて設定した「先行トレンチ」からの採集遺物、782～788は遺構検出の作業中や壁面の清掃中などに出土したもので、詳細な出土地点が特定できない遺物である。

761は赤絵（五彩?）の磁器製品で、破片のため形態は不明である。外面には赤絵による色彩が残存している。型打ち整形による袋物、もしくは人形類などであろうか。景德鎮系の製品であろう。

762は景德鎮系の磁器で、瓶類の破片である。外面に瑠璃釉を施し、内面は露胎となる。763・764は天目碗の底部で、瀬戸美濃系の製品である。いずれも高台部の周囲のみを円形に削り残す加工を施している。また、763の見込みには釘による刺突文が認められる。765は古瀬戸の瓶子の肩部破片である。外面に鉄軸が施され、蕨手状の文様が施されている。766は管状土鍾の完存品。

767は備前焼徳利の口縁部破片である。768は古墳時代前期の土師器壺の胴部で、混入品である。外面に刻線のあるベルト状突起をもち、内面には刷毛目調整が施されている。769は瓦質土器、770は瓦を円形に再加工した製品である。771は土人形で、布袋像を象っている。江戸時代中期以降の製品であろう。772は砥石で、砂岩系の石材を素材とする。773は煙管吸口の破片で、近世の所産である。774は鉛玉（鉄砲玉）である。775は初鋳造年1023の北宋銭「天聖元寶」である。

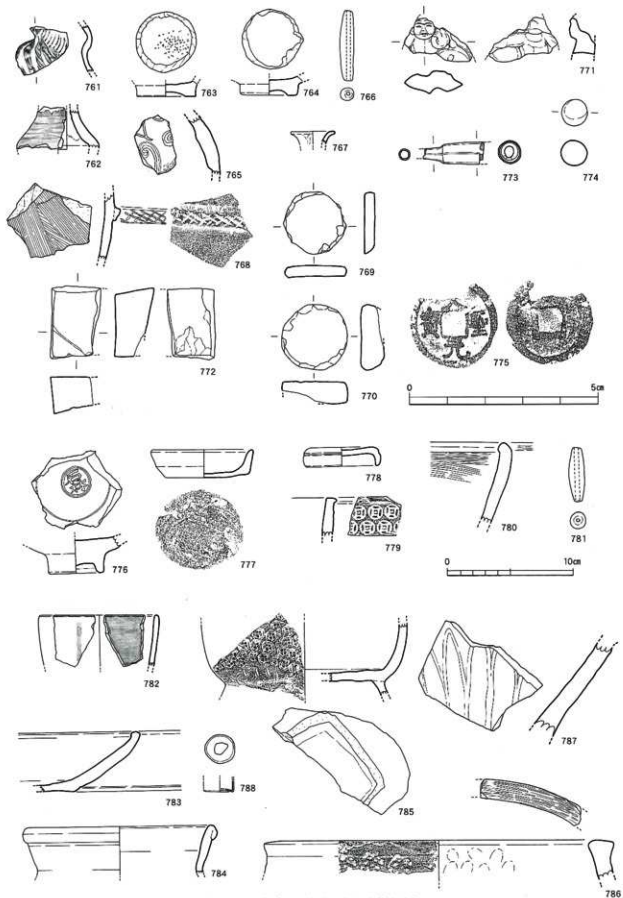
776は龍泉窯系青磁碗の底部で、見込みに「石林」の刻印がある。777は土師質土器の小皿で、底部は磨滅しているが、糸切り痕がわずかに認められる。778は手摺ね整形による土師質土器の蓋または小皿である。779は瓦質土器風炉の口縁部で、外面に七宝文の刻印が認められる。780は瓦質土器の口縁部、781は管状土鍾の完存品である。

782は関西系の軟質施釉陶器碗の口縁部で、内面に黒釉、外面に白釉が施され、緑彩が流れている。1590年代以降の製品とされている。783・784は備前焼で、782は鉢、784は壺の口縁部である。785は瓦質土器で、断面形態が方形となる脚部を有する製品。器種不明であるが、花瓶などに復元されるものか。胴部外面に刻印をもつ。近年の調査で同じような器種の破片の出土が増加しているが、大型破片や完形品の発見がなく、器種の復元には至っていない資料である。786は瓦質土器火鉢で、これも口縁部外面に刻印（スタンプ文）が施されている。口縁部上面はミガキによる仕上げがなされている。787は龍泉窯系青磁の瓶類で、底部付近の胴部破片である。内外面ともに青磁釉が施されており、外面に蓮弁文が認められる。15世紀代の所産で、大型の瓶類に復元される資料であろう。788は用途不明の青銅製品である。

上層出土
遺物先行トレン
チ出土遺物

その他

註(36) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内4』第1分冊(2006年)190頁



第226図 包含層・整地層出土遺物(1/3)

第3節 小結

前節までで報告した第72次調査における遺構の変遷をたどると、以下ようになる(第227図)。

14世紀代・15世紀後葉(寺院〔称名寺〕段階)

14世紀代の遺構は、土坑SX042・土坑SK039・井戸SE044である。称名寺の創建は暦応4年(1341)であるので、これらは寺院と併行する時期の遺構である。しかしながら土坑SK039・井戸SE044は調査区南東隅付近で検出されているので、寺院の領域外である可能性もある。

15世紀後葉
における堀
SD025の掘削

15世紀後葉になると、L字状に屈曲する堀SD025Bが掘削される。堀幅や断面形態は切り合いにより明らかではない部位もあるが、深さは1.1~1.3mを測る。K10区でL字状に屈曲し、南北6.5m、東西16.0mが検出された。東西方向の堀は16世紀代の堀とほぼ同じ位置に構築されているが、南北方向の堀は16世紀後葉から末葉の堀より内側に位置している。この堀は、称名寺の西側および南側の区画遺構であろう。堀の構築時期は、第72地調査区では良好な遺物が出土しなかったが、延長部が確認された第80次調査SD200(平成19年度調査)から出土した遺物により、15世紀後葉に比定される。従って、この堀は称名寺の創建時期までは遡らないことになり、創建段階における称名寺の区画遺構は今回の調査では確認できていないことになる。また、称名寺の主要堂塔についての遺構も今回確認できていない。

堀は称名寺
の創建時期
までは
遡らない

16世紀後葉~末葉(大規模施設段階)・・・1570~1580年代

江戸時代中期の記録によると、称名寺は「永禄」年間(1558~1569)に名ヶ小路町から「沖ノ浜」に移転した。移転については「府主ノ命」、すなわち大友宗麟の命令によるものだという(平親山称名寺『寛永十八辛巳年ヨリ正徳二壬辰歳迄過去帳』)。この記録は近世の記録に立脚し、同時代史料では確認できないので、その信憑性については慎重な検討を要するものであるが、「府内古図」A類などで今回の発掘調査地点付近の位置に「称名寺」の文字が描かれていないことなどを根拠に、この移転が実際に行われたということを指摘する考え方が有力になっている³⁾。仮に寺院の移転が行われたとしても、発掘調査で出土する多量の瓦や石塔類の存在は、寺院に帰属した建造物の大半が移動せずに、現地にそのまま残っていたことを物語る。

称名寺の
移転
(永禄年間)

堀SD025

発掘調査の所見では、16世紀後葉から末葉に、断面がV字状を呈する大規模な堀(菓研堀)SD025Aが掘削されたことが判明している。堀が機能していた時期の埋土中からは漳州系青花が一定量出土しており、堀の掘削時期は1570年代を遡らない。堀はL字状に屈曲し、南北方向の堀は15世紀後葉の堀より外側に位置することから、16世紀後葉に堀で囲まれる空間を西側に拡張したことになる。称名寺が「沖ノ浜」に移転したことが事実であるとする、この堀に囲まれ、拡張された空間は、旧来の称名寺の敷地や建物を再利用した「大規模施設」であり、16世紀後葉に寺院とは異なる機能を有する新たな施設が構築された可能性が考えられる。

「大規模
施設」の
構築

堀の中からは、陶磁器類・土器類、石塔類、瓦類、獣骨類など、多量の遺物が出土した。出土した瓦類の中で、特に注目すべきものは「鯪瓦」(第192図479・480)と推定される資料である。通常、鯪瓦は織豊系城郭で使用される道具瓦であるが、第72次調査区は寺院または大規模施設であることに注意しておく必要がある。当該資料が本当に鯪瓦であるとする、时期的にもかなり早い段階で使用された資料となり、また使用された遺物の性格が寺院または屋敷であることから、城郭所用瓦とは異なる性格をもつことになる。獣骨類についても、当時の食生活で基本的に食用に供されることが少なかった「ウシ」や「ブタ」などの獣骨の出土が注目される。

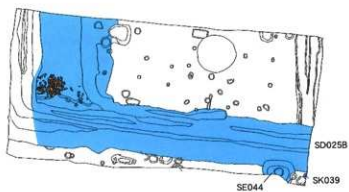
名ヶ小路の
廃棄土坑

堀SD025の南側には、名ヶ小路が位置する。名ヶ小路の北縁部近くには、人の往來の少ない地点を利用して、廃棄土坑(ゴミ穴)が構築されている。

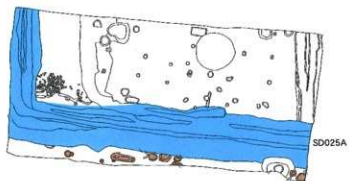
16世紀末葉~17世紀初頭(「町屋」段階)・・・1590~1600年代

堀SD025は1590年代(初頭頃?)には完全に埋没し、その直後に掘立柱建物SB045、土坑SK017、

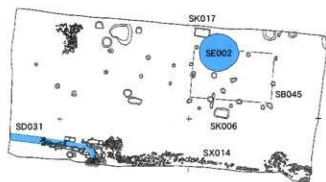
14世紀～15世紀後葉
(寺院[称名寺]段階)



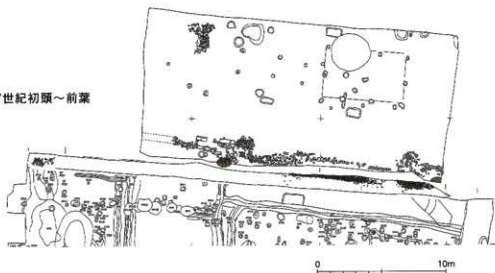
16世紀後葉～末葉
([大規模施設]段階)



16世紀末葉～17世紀初頭
([町屋]段階)



17世紀初頭～前葉



第227図 第72次調査における遺構の変遷(1/180)

SK006、井戸SE002などが構築される。

第72次調査の西に位置する第80次調査（平成19年度調査）の成果と併せて検討すると、井戸SE002は道路に面した町屋の裏手に位置することがわかり、また72次と80次調査で検出された井戸が、ある程度の等間隔で規則的に配列されている状況が認められる。この建物と井戸の関係は、典型的な「町屋」の遺構群の構成を示しているといえる。つまりは、16世紀後葉から末葉に「大規模施設」であった空間は、16世紀末葉から17世紀初頭には「町屋」にその姿を替えていることになる。

島津侵攻

この背景には、天正14年（1586）12月から天正15年（1587）3月までに至る「島津侵攻」が想定される。天正14年12月に豊後府内に侵攻した薩摩の島津軍は、豊臣秀吉の九州出兵により、天正15年3月より撤退を開始する。島津軍の侵攻は豊後府内に多大な被害と損害を与えたことが史料上に記録されているが、これを契機に調査区付近の「大規模施設」が廃絶し、その後の戦災からの復興の過程で「町屋」に姿を替えていることが想定できるのである。

唐人町

『府内古図』によると、調査区周辺は「称名寺」、あるいは「大規模施設」空間であり、第2南北街路を挟んで西には「唐人町」が存在した。「唐人町」からみると、街路を挟んで「称名寺」あるいは「大規模施設」が存在するわけであるから、島津侵攻以前の16世紀末葉における唐人町は「片側町」であることがわかる。その後、16世紀末葉から17世紀初頭頃には、第72次調査付近が町屋になるわけであるから、唐人町が第2南北街路を挟んで東西に展開する「両側町」に拡張された想定することが可能である。『天正一六年参宮帳』¹⁰⁾は天正16年（1588）から19年（1591）にかけて豊後府内に居住した住民が伊勢参りを行った記録であるが、この中に「唐人町」の住人が認められる。16世紀末葉から17世紀初頭の段階は、まさにこの『参宮帳』の時期に相当する。町屋の南には「名ヶ小路」があり、町屋と街路の境界は石列SX014で区切られている。この段階には名ヶ小路北縁の側溝は存在しなかったようである。また、石組溝SD031もこの段階に相当する。

天正十六年
参宮帳

なお、称名寺は慶長元年（1596）の大地震による沖ノ浜破壊後、再び名ヶ小路町の旧地に戻ってきた¹¹⁾とされている。しかしながら、第72次調査の調査範囲の中では、称名寺が戻ってきたことを示す遺構は確認できていない。

17世紀初頭～前葉・・・1600年代以降

瓦敷の道

第72次調査で検出された石列SX014と石組溝SD031は短期間で廃絶し、その上位を覆う形で瓦敷き街路SF001とSF008が構築される。これらは第48次調査で検出された瓦敷き道路SF001と一連の遺構である。層位的な所見から、これらの瓦敷き街路は名ヶ小路の最後のメンテナンス（補修）といえる遺構である。『雉城雑誌』によると、慶長7年（1602）に当時の府内藩主竹中重利は、城下町の整備のため、中世府内の住民を町組単位で近世府内城下町に移住させたという¹²⁾。であるとすれば、唐人町の住人も近世府内城下町に移住したのと思われ、第72次・第80次調査で検出された町屋の遺構群が17世紀初頭から前葉までのいつまで継続していたか分からない。建物や井戸などは早い段階で廃絶し、街路のみが最後まで継続使用されていた状況も想定できる。

注 10) 大分市大道町に所在する善巧寺所蔵史料。小泊立矢によって紹介された。
小泊立矢「豊後における中世時々の展開」（『史料館研究紀要』第2号 大分県先哲史料館 1997年）8頁
11) 大分市教育委員会『府内のまち 宗廟の栄華—中世大友再発見フォーラム—』（2006年）12頁
12) 『大分県史料』収録（1964年）
13) 註例に同じ。
14) 木村幾多郎『豊後府内城下町移転と旧府内町』（『大分・大友土器研究会論集』2006年）